

Fuminori Asami



雨ざらしのベニヤ板を見つけてーモチーフとの出会い ◆ 浅見文紀

Ryuseki Toshizawa



病床の父からもらった手紙に衝撃を受けた ◆ 吉澤劉石

Masao Tomosada



楽しくなければ芸術とはいえない ◆ 友定聖雄

Miki Mori



心から描きたいものしか描けない ◆ 森美樹

Koen Sasaki



時代の流れ、風を感じる書 ◆ 佐々木宏遠

Minoru Tamaru



人間とは何かを確かめたい ◆ 田丸稔

Masaya Hasegawa



常にプロ意識を強く持っていたい ◆ 長谷川雅也

Mika Terayama



制作しながら作品の変化を楽しむ ◆ 寺山三佳

Seigou Minami



氷裂ー北海道で焼物をやる意味を探って ◆ 南正剛

Mitsuaki Ogawa



感じたままを描く。情感が一致したときの喜び ◆ 小川満章

十人の作家の インタビュー

日展

芸術とは何か 創作とは何か

はじめに

日展は、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五つの部門からなる公募展で、世界でも類をみない総合美術展として開催しております。日本では、作家は公募展に出て世に認められていくことが多く、競い合い切磋琢磨することですぐれた芸術作品を生み出してきたという伝統があります。

歴史をさかのぼれば、江戸時代の長い鎖国の後、日本が産業の育成と同時に芸術文化のレベルアップの必要性を感じているなか、文部大臣の牧野伸顕が、オーストリア公使時代より日本の美術の水準を高めたいと願い、一九〇七年に文展を開催しました。これが日展のスタートです。

その後、文展は「帝展」「新文展」「日展」と名称を変えつつ、一〇九年目になります。当初は日本画、洋画、彫刻の三部門でしたが、一九二七年に工芸美術、一九四八年に書が加わり、総合美術展となりました。一九五八年より民間団体となり、二〇一二年からは公益社団法人となりました。

二〇一三年十月に審査に関する報道があつて以降、より透明性のある開かれた日展を目指し、審査体制や組織の改革に取り組んでまいりましたが、この改革を機に二〇一四年、展覧会名称を「改組新日展」に改め、今年は「改組新第三回日展」として開催いたします。

日展は、毎年十月に作品公募を行います。応募者は全国各地の十代から百歳まで、さまざまで、昨年度の応募点数は一二〇〇七点。そのうち入選は二二六八点(内新入選は三五五点)で、会員の作品など六九五点を合わせ、計二九六三点が展示されました。

今年も、約三千点の作品を一月にわたり国立新美術館に展示し、その後、京都、名古屋、大阪、富山と四会場を巡回いたします。現代を生きる日本の作家の新作が一堂に会す、熱気あふれる会場で、ぜひ多くの方に日本の美のいまを体感いただければ幸いです。

ここに、一万人を超える日展作家のなかで、中堅、若手の十人の作家の現在の考えをインタビューにまとめました。ご一読いただけましたら幸いです。

日展広報事務局

長谷川雅也

Masaya Hasegawa

p2



日本画



p6

森美樹

Miki Mori

浅見文紀

Fuminori Asami

p10



洋画



p14

小川満章

Mitsuaki Ogawa

田丸稔

Minoru Tamaru

p18



彫刻



p22

寺山三佳

Miki Terayama

友定聖雄

Masao Tomosada

p26



工芸美術



p30

南正剛

Seigou Minami

佐々木宏遠

Koen Sasaki

p34



書



p38

吉澤劉石

Ryusuke Toshiyazawa



書



工芸美術



彫刻



洋画



日本画

長谷川雅也

Masaya Hasegawa

京都に生まれ育った長谷川さんは、京都造形大を出て迷うことなく自然に日本画の道を歩んできた。心動かされた動植物の写生を重ね、独特の美しい青の世界を展開する。今年、「未来を担う新世代 山種美術館日本画アワード」の優秀賞にも輝いた。一九三八年に設立された日本画家・山口華楊氏の伝統ある日本画塾農鳥社の所属作家である。大学の講義を終えて戻られたアトリエで話を伺った。

小さい頃から絵を描いて

「小さい頃から、いろいろな紙の裏に描いたりして、絵や工作などを毎日やっていました。幼稚園でカタツムリの絵を描いて賞をいただいたのがテレビに映って、それを撮った写真があります」

小学校の時は、土曜の午後に絵画の好きな子供を集めて描かせてもらったり。

「親戚のなかでも芸術を目指した人はいなくて、美術に進んでどうやって生きていくのかわからなかったのですが、絵しかないと思いました。その頃は水彩絵の具やポスターカラー、パステルなどで描いていました」

予備校ではデッサンを繰り返し、京都造形大に入学。第二次ベビーブームでかなりの倍率だったという。

自分の作品に生きるデッサンに時間をかけて

造形大学では日本画を専攻。柔らかな優しいツヤのない絵肌にひかれて、迷わず、自然に日本画を目指していった。

造形大ができて五期目だった。大学一年の時は、まだ岩絵の具はただけで、一年間デッサンをしていた。

「そこで写生の大事さを学んだのは響いています。またその後大学の先生方からも、写生の面白さや素晴らしいさを学んだのが根底にあります」

数多くの公募展に積極的に出した。日展を選んだのは絵肌が自分に向いていると思ったからだ。学生時から日展を見ていたが、大学四年で初出品したところ、初入選。「びつくりして、うれしい、一生懸命描いた作品ですが、実感がなかなか沸きませんでした」。池の蓮を描いた。モチーフ自体が古いと言われ、今の時代に合う蓮をと思ったが新しい雰囲気になったかどうかかわらないと語る。京都府立植物園の中に自然に近い池があり、通って写生をした。大学院の二年間は落選し、その後アジサイを描いて入選。特選候補にもなった。二年間落ち続けた悔しさが溜まっていて、それが絵肌に出たという。

「悩んでいるときほど絵の評価が良いんです。絵の嵩というか、絵にぶつける気持ちが変わったような気がします」

らもよく『青が好きですね』と言われますが、なぜ自分が青かわからない。自然に湧いてくる心象的な色が青だと思っています」

京都府の植物園で描いた樹根で特選を

五年目に特選を受賞。「本当にありがたいことで、二十九歳でした」。そのときは苔むした樹根を描いた。樹根を見て、今まで味わったことのない感動があったので、迷わず描いたという。それも京都の植物園だ。京都府の植物園は歴史もあり、味がある植物や貴重な植物がある。樹根は茂った所にあり、気づかないこともある。それを見つけた時には言葉にできない感動があった。

「そのくらい深い感動がないと絵にしても表面的に終わってしまうのではないかと心の中の深さを教えてもらった対象です。釘づけではないですが、周りの雑踏も聞こえないくらい向き合えて自分の気持ちが入りこめました」

写生にかなりかかったが、本当に楽しかったので、何日も通い何枚も、毎年描いた。日展の前にもう一作、京展に出品した作品で樹根がある。もう少し反省点を生かす意味でも同じモチーフを描くことになった。

「この特選受賞には、お世話になったいい先生が多かったということもあります。自分自身は無心でした。ただ賞をいただいても反省点のほうが多いので手放しに喜ばず、次につなげたい。いつも悔しいほうが多いんです」



黙然 2001年 第33回日展

長谷川さんは青を多く使った作品が特徴的である。

「徐々に背景の青が強くなっていて、気づいたら真っ青になっていました。表情がなくなってきたのが反省点、悩みで、課題としています。鑑賞者か

ボルゾイ犬を描くために何年も犬舎に通って

また学生の中から追い求めているモチーフにボルゾイ犬がある。子供の頃から大好きで、憧れていた犬舎、九十五歳のおじいさんのボルゾイを描くことになった。最初の特選から二年後にボルゾイを描いて特選をいただいた。





「啼痕」 2006年 第38回日展 特選

勢いで描くものもある。写生を始めて二、三か月で作品にする場合もある。日展作品は百五十号くらい。かなり早く前の年に決まっていたり、数年前から決まっていたのを描いたりするという。「心の動くままに、楽しみながらやっています」

常にプロ意識を強く持つて

大学院を出てからは、大学で非常勤講師を務めている。大学院へ進んだ時点で、絵で貫きたいという気持ちが大きかったので、アルバイトをつないで少しずつ非常勤の話をいただいたという。何よりも絵を描くことを優先して時間配分を考えた。「精神的なところを高めていくのが大事です。みな仕事をしてという暮らし。反対されたり世間体を言われたりしましたが、頑固に『絵しかない』と言って、大学院まで出してくれたので応援してくれていると思うのですが、ありがたいです。」

常にプロ意識を強く持つていたいと思っています。妬まれごとや厳しい言葉も言われますが、自分自身は苦しみのほうが強いので。作品を重ねるごとにこれ以上描いたらいけないというのがわかるようになった。絵を描いているときは自分の感情が自然に出てきます。本当に美しいだけでなく心の闇ではないが、深いもの楽しくないものを作品にぶつけている。絵に向き合っているときは悶えるぐらい辛い時があります。なぜこんな絵になってしまったのだろう、ということばかり。いい絵になったと思ったことはなくて、いつまで続くかと思うんです」

と。表情も全然違います。犬だけでなくアジサイにしてもこの株でないと、というものを十五年前から追いかけています」

制作にあたっては、とりあえず無心に写生をして、絵にしようというのが見えてきてから構図が決まってくる。本画にしないで写生だけのものも多くある。数年越しのものもあるし、ばたばたと

人の日常に秘められた内と外、 光と影に翻弄される心情を描く

昨年、個展を開いた。学生時代からの本画十七点、写生百何枚からなるものだ。今までの軌跡を制作年順に並べた。「自分が一番うれしくて一番勉強になった。昔、無心にぶつけていた時の絵肌の深さが何とも言えない良さが出ていて、今は変な意図があると気づいた。周りの先生もそれに気づいてくださった。ただきれいな絵肌だけでなく昔の良さをプラスした今の新しい絵肌を作っていたらと思うんです」。

最盛期を過ぎた花や動物の中に、人の日常に秘められた内と外、光と影に翻弄される心情が繊細なタッチで表現されている長谷川さんの作品。

学生の頃から揺るがない思いがある。人と接しているときの明暗、表と裏、人と出会ったときその心の闇が一番気になり、それに悩ませられるという。「それが根底にあつて広がったテーマです。長年持つているもの、経験を積んで気になったのかもしれません」。

日展の魅力 今後の日展に期待すること

「今、若い人の団体離れがありますが、そうすると先細ってしまうので、若い人が憧れるような展覧会にしたい。そのためには作家一人ひとりが魅力ある作品を創らなければ、自分の絵を高めていなくてはいけないと思います」。



「隠逸」 2004年 第36回日展 特選

無心に、感じるままに

若い作家には「無心に絵を描いてほしい。変に意図したり計算したりでなく、描きたくて心が動いたものを描いてほしい。売る目的を意識している人が多いと思うので作家魂の意識を高めてほしいと思います」。

「鑑賞者の方は感じるままに絵の前に立つて他を忘れて向き合ってほしいです。作家を追いかけてもらおうとか。かなり長い間見ていただいている方もいますし。作品を覚えていただけると一番うれしいです」

長谷川 雅也

Masaya Hasegawa

1974年、京都府生まれ

1998年、日展初入選

2001年、京都造形大学大学院修士課程を修了

2004年、第36回日展特選

2006年、第38回日展特選

2008年、京都日本画家協会選抜展 京都府知事賞

2016年、山種美術館日本画アワード 優秀賞

現在、日展会員、日展京都都会会員、日春展会員、京都日本

画家協会会員(理事)、晨鳥社所属

森 美樹

Miki Mori

東京、港区に共同でアトリエを借りて制作しているという森美樹さんは、高校までは徳島の豊かな自然の中で育ったという。どこか、ルネサンス時代のフレスコ画を思わせる美しい絵肌。美しい茶系の色のルーツを伺うと「出身地、徳島の土の色かもしれません」という答えが返ってきた。小学生の時にはドイツで過ごしたことも。森さんのたどってきた道のり、これからを伺った。

幼少の時に芽生えていた表現したい気持ち。ドイツでの美しい一年

「幼少のころ、自分の中の言葉にならないものを表現したいという気持ちがありながらどうしたら良いかわからず、いつか表現できるようにになりたいという思いがありました」。そう語る森さんは徳島に生まれ、高校卒業まで徳島で育った。多感な子供時代に、心に残る経験をしている。

油絵から大学で日本画を専攻

中学・高校は美術部に入り、本格的ではないが油絵を描いていた。日本画を選択するきっかけは高校一年のときだった。

徳島に大手のデパートがオープンして日展が開催されたのだ。その時初めて日展の作品を見、現代の日本画がこういうものだということを知った。

小学校三年の秋から一年ほど、父親の仕事の関係でドイツの小さな町ボーフムに滞在した。現地はバカンスが長く、家族でヨーロッパ各地の美術館や博物館を回った。ルーブルの「モナリザ」など当時は柵もなくかぶりつくようにして長時間見入った。「美しい一年でした。童話や物語で見た世界が残っていて。現地の学校に入りましたが言葉がよくわからなくてもすぐに仲良くなりました」

そのころから絵を描き始めていたという。

た。それまでは油絵を描いていたので知識がなく日本画は水墨淡彩のイメージを抱いていた。

「作品は大きく作風もさまざままで絵肌も魅力的。さらさらしたマチエールなど未知の表現に興味を持ちました。どうやって描いているのか知りたかったというのと、自分が描いている絵柄が日本画に向いているのではないかと思ったのが日本画を選んだきっかけです」

高校三年の時は金沢美術工芸大を受験するも不合格。東京で予備校に通い、当時は多浪するのも当たり前前の時代、三浪し、最終的には武蔵野美術大学の日本画に入った。大学ではいろいろな先生から教わったが、先生方や先輩方の制作を見て、作家としてどうあるべきかという姿勢、精神的なものを学んだのが大きかったという。

大学院卒業後、迷った時代。心から描きたいものしか描けない

たらいいか定まっていなかった。試行を重ねながらシンブルにそぎ落として明確にし、表現したいものをどう見せていくか固まってきたのだ。

絵としてのスタイルは決まらず、卒業制作は人物を描いた。大学院に進み、その後二年ほど描かない時期があったが、心の中では絵をやつていこうと思つていたという。

そのころ作家活動をするならどこかの団体展に出すのが通例であったが、大学在学中も卒業

後も迷つて出品しなかった。自分自身の制作を考えると心から描きたいものしか描けないタイプ。日展は自由で作風が幅広く、作家それぞれが思い思いに描いた作品を受け入れてくれるという印象があり、自分の作品も受け入れてくれるのではないかと思った。大学院を出て二年経過していた。

まず日春展に出品し、初入選。その年から日展にも出したが落選し、初入選は翌年。知り合いが妊娠したことをきっかけに、好きな高松塚古墳の「星宿図」という天井に星座を模した図画からヒントを得て、星(子)が宿るというイメージで作品を描いた。三十一歳で日展入選。「その後も落選が多く、入選しては落ちて、落選入選落選落選というような感じで向いていないのかなと思つた時期もありました」。自分のなかで方向性が定まっていなかった。

しかし転機が訪れた。「たまたま多摩美術大学の米谷清和先生のグループ展に誘っていたんです」。無所属や他団体の作家、日展の憧れの作家も参加していた。そこで自分の意識の甘さを認識し、中途半端なものは出せないなと気を引き締めたことで落選しなくなった。落ちていた時期は苦しかったが、その時に試行錯誤したことが今の絵につながっていると振り返る。

試行錯誤から表現方法が固まってきた

落選を繰り返した時期は作品に込めたいものが多く欲張りすぎて、それらをどのように表現し

「十月の贈りもの」 2007年 第39回日展 特選 作品サイズ 1750×2250mm



「姿を残してほしい」と呼ばれた

一回目の特選は、落選しなくなってから四枚目、二〇〇七年の作品「十月の贈りもの」である。十月にスケッチをしていたとき、黒アゲハが飛来してきた。その出会いはうれしい出来事だったが、「時期外れに生まれて仲間にあえないのではないか。この子は一人なんだ」という気持ちも起こった。夏の植物が死に向かつていつている時期。生に満ち溢れた舞台から冬に向かう舞台でかすかにたくましく生きている命。「この二つの相反する状況に心動かされて作品にしました。人物と黒アゲハはその場面を描いています。この人物は自分を描いたわけではないですが似ているかもしれません」。

徳島の土とヨーロッパのフレスコ

「土屋禮一先生に『特徴はこの褐色の色合いだね』と言われました。もともと古色を帯びた色が好きですが、考えてみるとこれは郷里徳島の土の色だなど。背景がフレスコっぽいと言われたり板やキャンバスに描いているのかと尋ねられたりしますが和紙に描いています。ヨーロッパでフレスコ画を見た影響もあるのかもしれませんが、お寺や古墳を頻繁に訪れた経験や幼少期に接していた土壁や土間の影響もあるのではないのでしょうか。日本画で使う岩絵の具は粒子があるので、そういう絵の具の特徴や質感を生かしたいと思っています」。物に託して表現するというよりは物と物との間の空間、余白に気持ちをこめたいと語る。

二〇一三年の特選「姿」の制作は、時折通る道沿いに咲いていたアジサイに、あるとき不思議とひきつけられてずっと見入ったことから始まった。通常は描きたいものを自分の中で時間をかけてあたためてから制作していくが、これはすぐに作品にしたいと思った。その年の日展で描いたのだが、制作後その場所に行くとき更地となりアジサイはすでに跡形もなくなっていた。

「この作品に限らず、今まで描いた情景や植物がなくなってしまうことが多く、『描くことで命を奪っているのではないか』と考えたこともありましたが、東俊行先生に『もしかしたら姿を残してほしいと呼び寄せられたのではないか』と言っていたとき、今は素直に描きとめていけばいいのかな、と思うようになりました」。

感動をなんとかして表現したい気持ちももとに

今年の作品について尋ねると「毎年セイタカアワダチソウが群生していた場所へある冬足を運ぶと、葛が巻きついたニワウルシの幹が乱れ立つ枯野に一変していました。ニワウルシも葛も自生して伸びていくような生命力の強い植物ですが、冬枯れの姿は墓標が立っているようにも見え、夏に栄えたものが冬になって死んでいく光景が「夏草や兵どもが夢の跡」という言葉を彷彿させました。そういう情景を描ければと思っています」。

見てくださる人の心に残る作品が描ければ

「私が大切にしていることは一作一作を現時点

でできるベストをつくそうということ。悩みながら続けているわけですが、その悩んだことや迷ったことに後々助けられていることがあります」

発表、制作を続けていくのが一人では難しいということがあり、モチベーションを保っていける場や仲間は大切だと語る。

「体感し感動したことを形にしたいという気持ちがある。今も変わらず存在し、それを絵画表現にしたいという思いがありました。作品に人物が登場します。人物画を描いているという意識はなくて、私が受けた感覚や感情を形にしていくなかで人物が存在するほうが表現しやすくなりそうです」。

スケッチは作品に使う使わない関係なく、形をとらえることを楽しむ。自然の中に身を置いてスケッチしながらその場の空気感を全身で感じることは、自分が制作する上で必要であり非常に大切にしていることだと語っている。スケッチ中に心揺さぶられる些細であるけれど印象的な出来事に出会うことが多く、なんとかしてそれを表現したいという気持ちが湧いてきて制作の種のようなものとなる。それを画面上にどう表現するかは時間をかけてあためていく。

日展の魅力

「日展は私にとって発表の場として大きい。観客動員数が多く全国巡回して不特定多数の方に見ていただける。作家それぞれが自由に自分の描きたいものを描いて、なおかつそれを受け止める懐の広さが魅力です。大学からお世話になった先生方だけでなく、日展で初めてお目にかかった先生方からも『自分のやりたいことをやりなさい。好きな世界を突き詰めていきなさい』と言っていたきました。そのように束縛されることもなくいつも温かく見守ってくださっていることが

「イタリアを旅した時に、ヴェローナの教会の壁に描かれている無名の作品にひかれました。今、森美樹の作品で発表していますが、そのように、名前に関係なく見てくださる人の心に残る作品が描ければと思います」。森さんは慎ましく、その絵の中から抜け出てきたように思えた。

本当にありがたく感謝しています」



「姿」 2013年 第45回日展 特選



「初雪」 2014年 改組 新 第1回日展

森 美樹

Miki Mori

1968年、徳島県徳島市生まれ
1995年、武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻日本画コース修了
1999年、第31回日展 初入選
2007年、第39回日展 特選
2009年、第44回日春展 日春賞
2008年、第27回損保ジャパン美術財団選抜奨励展 損保ジャパン東郷青児美術館(東京)
2012年、第5回東山魁夷記念日経日本画大賞展 上野の森美術館(東京)
2013年、第45回日展 特選
2015年、「公募団体ベストセレクション 美術 2015」東京都美術館(東京)
2016年、「都美セレクション 新鋭美術家2016」東京都美術館(東京)

洋画

浅見文紀

Fuminori Asami



池袋から八十分ほど、列車はトンネルを何度も抜けて緑豊かな秩父に着く。秩父で生まれ育ち、東京での学生時代を経て埼玉県の高校教員として勤務し、また秩父に戻り、退職後は画業に専念する浅見さん。秩父の自然の中で見つけた様々な素材が並ぶアトリエで話を伺った。

しかし、いよいよ高校三年。進路を考えると、「美術」が残った。高校三年からテニス部は休部。美術室を借りてデッサンを始めた。堅い丸椅子に座って長時間描くことがまずたいへんだった。

二浪の後に多摩美術大学、 埼玉県高校教師に

「たまたま多摩美が受かって良かったです。校舎はブレハブでしたが、三年生から抽象、具象、立体のクラスに分かれ自由に制作していました」卒業時、一般の企業も考えていたが、運よく埼玉県の教員試験に受かったという。最初は越谷の新設校に六年ほど赴任。その後、三校勤務する。

三十五歳で日展へ出品

多摩美の担当の先生は新作協会所属だったが、それまで展覧会に出品したことはなかった。しかし、教師になって生徒に展覧会への出品を勧めるには自分が出さなければと思い、埼玉県展に生徒と一緒に出品をした。その後、一水会に出品、それから八年ほど経って、さらに目標があれはと、三十五歳のときに日展に出品する。最初の頃は夫人をモデルにしたり、子供をモデル

ソフトテニスに夢中になった学生時代

浅見さんは、子供の頃から絵は嫌いではなかったが、サークルは体育会系で、中学、高校ともにソフトテニスに夢中だったという。「高校時代、知り合いの顧問の先生から美術部に勧誘されたのですが、丁寧に断りし、テニスだけを一生懸命やっていました」中学、高校とテニス部部長になり、当時はテニスをするために学校に行っていたと振り返る。

大学に入るまでに二浪することになった。当時の芸大は写実の作品をとっており、一次試験の油絵は通ったものの二次試験の人物デッサンは描いたことがなかった。予想通り落ちて浪人生活が始まった。予備校は、成績でクラスが分かれており、半年間はAからFまであるクラスのF。甘くない。きつかった。しかし、希望を抱いて受験したが一次で落ちてしまい、二浪が始まった。多摩美用に写実的な絵を描き、藝大用には構成的な絵を描いていた。

ルにして人物画を描いていた。

稲を天日干しするときの「はざかけ」を背景にして人物を描いたり、自分の幼少の頃の心情を息子をモデルにして描いていた。

その後、地元の夜祭りを取材して作品にした。秩父夜祭りは日本三大曳山祭の一つである。友人に頼んで、屋台の組み立てから、曳き踊りの人物や屋台芝居なども詳細に取材した。二年ほど作品を制作していたが、その伝統と迫力に圧倒され、筆が止まってしまった。悩んでいた時、あるモチーフに出会った。



雨ざらしのベニヤ板を見つけて

熊谷の伝統ある男子校で教師をしていた頃、学校の使わなくなった焼却炉の後ろに大きなベニヤ板が雨ざらしになっているのを見つけたのだ。木目がきれいで、所々薬品がかかっているのか緑色になっていて、すぐに研究室に持ち帰った。四十五歳のことだ。背景にこの板を置いて息子を描いた。もともと平面的な絵が好きで、この板はちょうど良かった。しかし初めて描いたときは認められるかどうか不安だったという。幸いに入選する事ができ、その後は板を複数並べたり縦横図にしたりと、子供のシリーズを続けていたが、また変化が出る。

絵から人物がいなくなるのは二〇〇九年。「冬の季節に枯れた植物を採集して静物画を描きました。大丈夫かなと不安でしたが」

段ボールを枯れた植物と組み合わせた「化身」

また、このとき組み合わせた段ボールもあるきっかけからだ。「ちょうど夏休みになる時に学校で耐震性の工事のために段ボールが配布され、社会科の部屋に積み上がっていたんです。無造作に積んであったのですが、それが造形的でまるで地層のような感じとして描いてみたいと思いました」



枯れた植物や地層のような段ボールだけでなく、立体的なものも木で作った。時間のゆつたりした経過や、長い時間をかけてできたダイナミックな植物のフォルムを、段ボールの直線と対比させつつ、立方体の角材を配置し、オウム貝等も添えて構成した。

この斬新なシリーズで二〇〇九年と二〇一二年に特選を受賞した。その後はオブジェ的なものにも挑戦している。

「タイトルの『化身』は、『変容』でもよいのですが、『化身』はインパクトがあると思いました」

一水会で秩父の自然を描く

風景画は一水会の仕事にしているが、秩父の天然のつららをよく描いている。毎年取材に行っているという。非常に寒い中での取材となる。つらは厳寒の中で少しずつ成長していく。年によっても違いが違ふという。初個展のメインの作品となった。

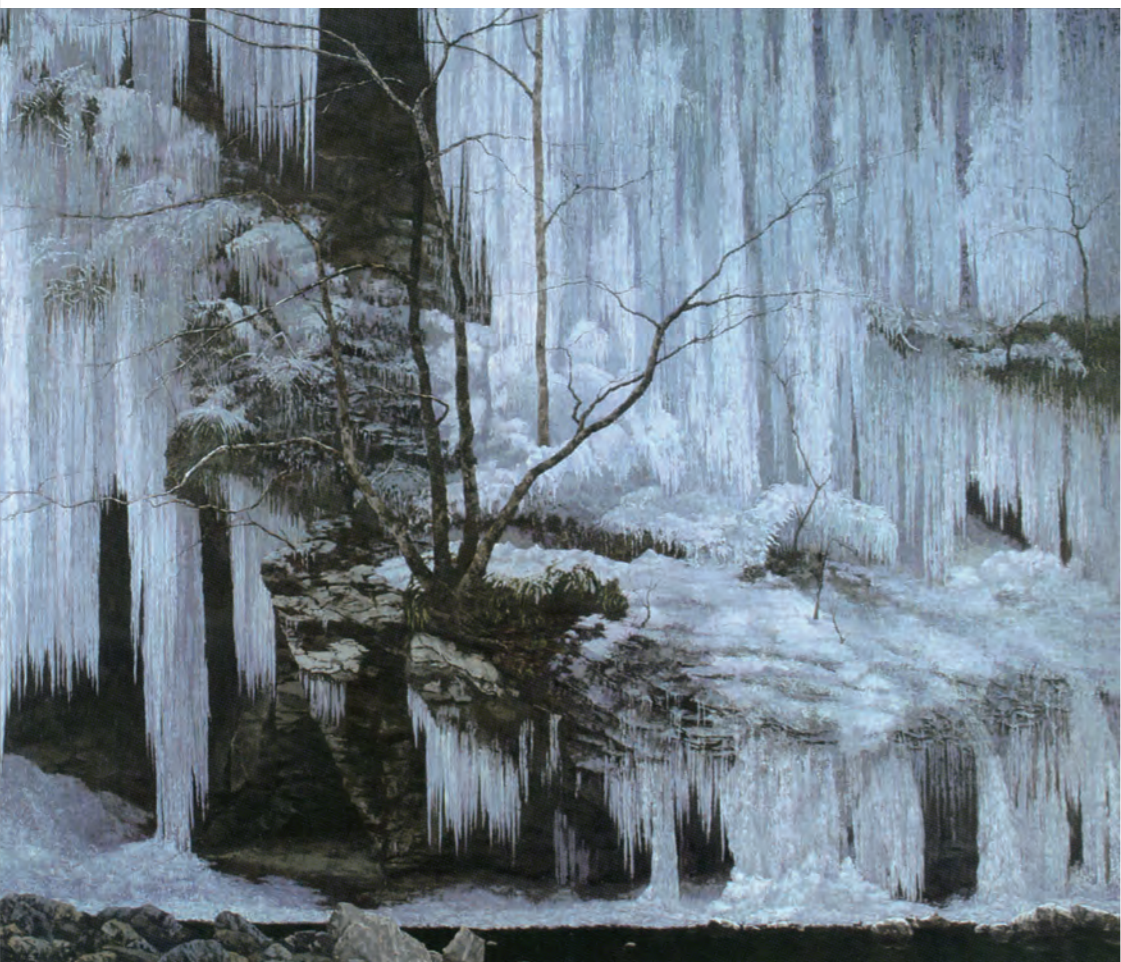
教師をしていた時は夏休みに学校の研究室で一水会展の絵を、夜は自宅のアトリエで日展の作品を描いていたが、退職して今年で3年目。アトリエで制作に専念し、日々モチーフと格闘している。

日展の魅力

日展の魅力について尋ねると、「日展は、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書と五科ある事が最大の魅力です。一堂に見られる展覧会は無いです」。

若い人へ

「今の若い人は上手ですから、自分のほうがいろいろ勉強させてもらっています。教壇に立ってい



厳寒氷柱 2012年 一水会

化身 2012年 第44回日展 特選



た頃の悩みの種は、油絵を描く人が減ってデザイン系が多くなっていること。自分が受験したときは油絵科が一番多かったのですが、ちよつと寂しいですね。

高校の音楽、美術、書道の選択科目の中で、男子は美術を選ぶ人が多くいました。最近では「汚れる、掃除が面倒くさい。時間がかかるのが嫌」など、そういう理由で傾向が変わってきました。

亡くなられた彫刻の佐藤忠良先生が、ある講演で「汗をかけ」「恥をかけ」「時間をかけなければ」とおっしゃっておられました。時間をかけるから身に入るといことがあります。絵を仕上げるのは時間がかかりますが、頑張つて欲しいと願います」

浅見 文 紀

Fuminori Asami

1955年、埼玉県秩父市生まれ。
1980年、多摩美術大学絵画科卒業。
1995年、一水会展石井柏亭奨励賞。
1996年、上野の森美術館大賞。
1997年、埼玉県展県知事賞。
2009年、一水会展文部科学大臣賞・日展特選。
2012年、日展特選。
現在、一水会常任委員、日展準会員。

小川満章

Mitsuaki Ogawa

洋画

岐阜駅で迎えていただき、車で岐阜の町を案内していただきながらアトリエへと向かった。長良川の川縁で子供のころ遊んだ思い出を伺い、遠くに岐阜城を眺め、古い街並みの残る通りなどを通して到着した。住宅地の一角にある小川さんのアトリエは、天井が高く、明るい光が差し込んでいる、かつて倉庫として使われていた建物。大作はこちらで描くという。

子供の頃から絵が好きだった

一九七〇年に岐阜で、新聞記者であった両親のもとに生まれた小川さんは、子供の頃から絵を描くことが好きで、絵は一生描きつづけたいと心に決めていたが、将来画家になるというのは現実的ではないと考えていた。絵に少しでも関わる仕事をと、京都の大学を卒業後はデザイン系の会社に就職した。

しかし、まもなくそこで運命を変えるできごとが起きる。二十三歳の時、父が他界し、その半年後に母も他界してしまったのだ。「会社員として生きていくつもりだったのですが、ものすごくショックを受けて。離れて暮らしていたのですが、心の支えになっていたのを痛感しました。その時いろんな事があつたはずなんです、今から思い返してもはつきり思い出せないくらいに精神状態でした」。そのとき、絵を趣味ではなく、身を削ってでもやって行こうと強く決意した。会社を辞めて岐阜に戻り、真剣に取り組みはじめた。

当時はただ一人で描いていた。目的があつて描いていたというよりも描かないと平常心でいられない切羽詰まったものがあつて、描かなければという気持ちだった。「孤独とか絶望を感じている時に、絵に救われるということを実際に体験しました。歴史に残る名画だけでなく、無名の作家の作品にも感動したものが、たくさんあつたのですが、

その時、心に響いたどの絵にも共通して感じたのは、何かのためにというよりも、自問自答を繰り返して描いているということ。「美しい」とは、こういうことではないだろうか、キャンバスと格闘している絵に、自分は励まされましたし、そういう絵を自分も描きたいと強く思いました」。

日展の東海展を見て

日展は、巡回展が名古屋であるので、よくみていた。二十年前の会場は満員電車のように混んで賑わっていた。作品も、いいと思うものがたくさん

ある。日展は日本最大の美術展。ひとつの目標として、ここに入選したいと思った。しかし、何度か出品したが落選していた。「自分のなかでは実績

がほしいというよりも絵が描ければよいという思いだったので悲しくはなく、絵が描ける喜びのほうが大きかった。日展の初入選は三十五歳でした。特選は三十九歳の時だったので、突然現れてすぐに受賞したと言われることがあるのですが、二十五歳からの何もない十年がありました」。

感じたままを描く。 情感が一致したときの喜び

作品や制作については、いつも感じたまま描こうと努力している。「僕は、実際に目の前にあるもの、あつたものを描きますが、写真のように機械的に描写してしまわないように、何を描いて何を描かないかの選択、そして選択したものをどう描くか、物と物との関係、空間をどう捉えるか考えます。そうやって絵ができてきますが、それが情感と一致した時、ふわつと嬉しくなります。それが出たときに筆を止める。それが来るのに時間がかかる。色と形の組み合わせで何かを表現できる瞬間がある。そこにたどり着いたときの喜びは大きい。「感じたまま」というのは、言葉にしにくいのですが、そういうことが近いのかなと思います」。

自然のものがいちばん美しい

自然のものがいちばん美しいと語る。それより美しいものはない、だからそこから学ぶという考え。「日洋会理事長の塗師先生が、『具象絵画

椿 2015年制作



の原点は「自然との対峙」、自然をよくみつめ、独自の創作に挑戦しなさい」とよくおっしゃいます。自然というのは風景だけではなくて人物や静物も同じこと。対象をよく見つめて、そこから学び、描いていく。その姿勢は変わらずにいたいと思います」。

「日展出品は人物中心だが、個展や小品は風景も静物も動物もすてきだと思ふものは今なんでも描きたいと考えている。「決まったモチーフにするには、自分自身まだ未熟なので、時間をかけて淘汰されて自然と限定されてくるのが理想です。ただ、描きたいと思うものには、自分の生活がそこにある気がします」。



室内 2009年 第41回日展 特選

いかなかったりです」。

また、題名には感情を表すことばは入れたくないという。入れると見た人がそう思ってしまうからだ。「日々」は、なにげない大切な日常を生きる。その美しさを描きたいと思いました。一日のはじまりに、窓からそそぐ朝の光の中で女性が髪を結んでいるイメージ。内に秘めた女性のたくましさ、芯の強さに人間としての魅力を感じます。でも、それは僕の考えであって、みていただく人には自由に感じてもらえた方が嬉しいです」

若い人へ、自分を信じて描き続けてほしい

若い人へのメッセージを尋ねると「絵を描くというのは、描く人が何を描くかを自分で選択し、自分の考えで描くので、絶対にその人なりのものしかでてこない。その人が生まれてこなかったらできなかつたものができあがる。それが芸術。自分を信じて描き続けてほしいと思います」。

出会いの拡がる日展

日展については、「たくさんの方が見てくださるのはありがたい。それは出品者にとつての日展の魅力だと思います」。日展で認めてもらえてから、いろいろなことが拡がったという。「日展で作品を展示してもらえようになつて、多くの方に僕の絵を知ってもらえるようになりました。個展、グループ展、雑誌の依頼など、たくさん声をかけて

昨年、一昨年の日展は人物中心で、それ以外のモチーフをできるだけそぎ落として描いた。今年は花やテーブル、鏡なども入れ、物と物の関係で表現し、室内風景にしようとして取り組んでいる。「モチーフが限られると、なにもない空間の扱いが難しくなりますし、モチーフが増えれば、物と物の

関係はそれだけ複雑になります。どちらも難しいのですが、その考え方がその時の作家自身の姿だと思っています」。

二〇〇九年の特選受賞作品については「感じたまま描くということができたように思う。感じたままという作業なので、波がある。うまくいったり

いただけるようにもなりました。先生、先輩、仲間との出会いがありますし、作家だけでなくギャラリーや美術誌の方とも出会うこともできました。すべての人たちが、絵と真剣に向き合い格闘していますから、なにげない一言も心に響き、自分の糧となっています。本当に感謝しています。

日展を鑑賞される方々にとっては、日本画、洋画、彫刻、工芸、書と五つの科があることが大きな魅力ではないでしょうか。ひとつの会場でいろいろな表現に出会うことができ、心に響く作品

に出会える可能性が高い。絵を見ることは、見る人の感性を通じて感じ取ることですから、人それぞれです。素直な気持ちで見ていただけたらと思います」。

感じ方を育てる、絵の大切さを知って欲しい

小川さんは子供に教える絵画にも力をいれている。「『子どもの美術』という本の冒頭で『絵は

上手に描こうとするよりも、見たり考えたりしたこと自分で感じた通りに描くことが大切です。真剣に描き続けていると上手になるだけでなく、人としての感じ方も育ちます。この繰り返しの中で自然の大きさがわかり、どんな人にならなければならぬかがわかってきます。』という趣旨のことを語っています。どんな職業につくにしても、美しいものに感じる心をもつことが大切。それが正しい心になっていく。絵は人にとって必要なものだと思っています」。



日々 2015年 改組 新 第2回日展

小川 満章

Mitsuaki Ogawa

1970年、岐阜市生まれ
1993年、京都工芸繊維大学工芸学部造形学科卒業
2004年、日洋展日洋賞
2005年、日展初入選
2009年、日展東海展中日賞
2009年、日展特選
2013年、日展特選
現在、日洋会監事、日展準会員

田丸 稔

Minoru Tamaru

JR新倉敷駅前から倉敷芸術科学大学行のバスで十分ほど。小高い山に登ってバスは止まった。山間にいくつもの校舎が建ち並び、芸術に特化した私立大学。ここで田丸さんは教鞭を執るとともに作品制作を行っている。階段を駆け下りて颯爽と現れ、まずはアトリエを案内くださった。

天井が高く、窓から光がふりそそぐ 大きな部屋

「学生に制作現場を見せながら、できたらと思っ
ています。一緒に制作していくのもいいと思っ
ているのですが、なかなか」。学生も二十四時間制
作できる環境だという。

制作中の日展の作品を見せてくださった。愛ら
しい少女がふたり寄り添っている。まだ粘土のあ
とがわかる五十パーセントの制作段階とのことだ
が、詩情豊かな作風がうかがわれる。

漫画を見て描くのが好きだった子供時代

研究室で田丸さんのこれまでの軌跡を伺った。
広島出身のご両親のもと一九六八年、島根県
に生まれる。三歳から小学校二年まで北海道で育
ち、その後東京に移り、中三までを過ごし、高校は
島根の進学校へ。そして岡山大学へと進む。

小さい頃から漫画を見て読んで描くのが好き
だった。手塚治虫やドカベンの水島新司、ドラえ
もんの藤子・F・不二雄などだ。中学高校で受験
の時期となると、勉強はいやで落書きばかりして
いた。落書きが自分を取り戻せる唯一の遊びだっ
たという。

図画工作や絵が好きで、進路にしたいと漠然
と想っていた。「母からは勉強しているのかとや
かましく言われ、いかに家を出るかを考えていま
した」。悩んでいるときに、高校の担任が東光会
の金本裕行先生で、「大学の教育学部で高校の

美術の教員免許をとったらよい」と勧めてくれ
たのだ。

「とにかく絵を描いたり、何かをつくったりする
仕事の世界のどこかに行きたかったんです」

芸大・美大を目指して浪人するくらいなら、
大学を早く出て月給をもらう暮らしをしたほ
うがよいと思い、岡山大学教育学部へ進む。

岡山大学で恩師の彫刻家との出会い

大学に入ると、その後の進路を大きく決める
恩師との出会いがあった。現日展顧問で彫刻家
の蛭田二郎先生である。大学に入ってわかったの
が、周囲には教員になって作家を目指す人はあ
まりいないということで、これはショックだった。
しかし、蛭田先生からは「教員になって作家を
目指す、その考え方でいい」と言われ、救われた
気がした。

また、絵も抽象がさかんで、女性像を描ける
と思っ

たという風潮があった。蛭田先生は女性像を主
体にした彫刻家で、「魅力を感じることを堂々と
すればいい」と、そのときに自分が求めているこ
とを全部言ってくれた。自分に彫刻ができるか
どうかも考えなかったが、先生と話をしているの
が、居心地がよかった。また優秀な先輩がたくさ
んいることもわかった。直前にイタリヤへ行っ
た人や広島の高村光太郎大賞で賞を取っている人
など、彫刻の伝統を感じた。「蛭田先生にここ
までできると断言され、たいへん救われた思いで、
彫刻を始めました。しかし、やってみたら難しく
てたいへんだったのですが」。美術教員を目指す
なら、自分でものをつくってその制作の経験を積
むことが指導者としても近道だとも蛭田先生か
ら教えられた。

やがて大学院に進み、修了のころ、いよいよ自
立しようと考えた。子供の頃北海道で育ったの
で、北海道で教員ができたらいと思い願書など
を取り寄せていたら、先生から「それはどうい
うことだ、出ていくのか」と言われたところに、思いが
けない話があった。倉敷芸術大学の設立に伴い蛭
田先生が行くので「来るか」と言われた。九十三
年のことだ。そして現在に至る。

蛭田先生は現在八十四歳。「今の僕は四十七
歳で、先生が五十二歳のときに大学で出会ったわ
けです。大学に対する不平不満や他の教員の悪
口を言ってもいつも笑っている先生でした」。

大学四年で初出品、初入選。最年少入選

日展には大学四年のときに初出品した。二十
一歳で初入選。しかも最年少入選だった。「褒め
られて舞い上がってステージで歌も歌いました」。
それからは毎回入選。

特選は、一回目が三十二歳のときだ。特選以
降、「表現が明確になってきたのは、より最近の気
がします」。

人間とは何かを確かめたい

二〇一四年の作品「叙事詩の男と馬」は男性の
人体と馬の頭部を組み合わせて構成した作品
で、日彫展に春に出した作品が評価され、東京都
美術館主催の「都美セレクション 新鋭美術家二
〇一五」展の出品作家として選ばれたシリーズの
ひとつである。ポリウムやマスなど彫刻の要素を
見直そうと考えた作品。

二〇一五年は女性像を「部屋」というテーマで
つくっている。「造形のテーマとしては量塊の組み
合わせだが、もう少し、もっと抒情性に基づいて
しなやかで美しくというコンセプトである。モデル
は別のところでデッサンしたり記憶に留めたり。
詩的なことを表現したかったのだが、馬の連作と
女性像の連作のふたつは大きくかけ離れていな
い。人間とは何かを確かめたいというテーマで共
通している」。いずれもあまり描写的なことにとら
われないで、マッシュに土のポリウム感を強調す

るモチーフとなった。

田丸さんにとって馬や人体、男のトルソは自刻
像の意味合いがあるという。馬の頭にしがみついて、
足場を失っている状態。つまり重力を失ってどうい
う体の状態になるか。見る人に想像してもらいやす
くするための題名をつけている。「歴史的な物語



で人間の大きな挫折や壁、葛藤がテーマになる話から題名のヒントを得ているが、自分に照らし合わせて想像してください。造形としてマッシブで量塊性を強調できるモチーフということである。

東京の広い会場で展示していただける日展

「最初から教員をしながら制作を続けようと思っていたが、負担が少なく長い期間東京に作品が展示できるというのは日展しかない。地方にいる者にとっては、出品手数料だけで、東京の広い会場で一か月も展示していただけるのですからこんなうれしいことはありません。個人で個展を開くのはたいへんですし、かといってどれだけ人が集まるかわかりません。」

そして日展は自由です。同じようなものが好きな人が集まっているという点で、他の団体との差別化ができています。一般的には敷居の高いイメージがありますがそんなことはないのだと、学生にも薦めています」

目標はミケランジェロ

「目標はミケランジェロであり、古代のギリシャ彫刻家たちでもあります。ギリシャ神話の中の神様が粘土で人間をつくる営みをなぞるような気持ちで生みだしたい」。実際につくってみるとなかなか形にならないという。ふだんモデルがいて描写しようとしてもできないことがたくさんある。自

叙事詩の男と馬 2014年 改組 新 第1回日展



分の意志で動かせないところは見てもつくれない。たとえば背中や耳などは、見たり描いたりイメージを繰り返してくり直して粘土にしてい

形にしていくと自分のなかの欠けた感覚が埋まっていく感じがあるという。粘土でつくっているが感覚的なイメージの人間像がじわじわできていくという思いをもつ。「すぐにできることならやめてし

まうと思いますが、いまだにそういうものが形づくられている思いのさなかにあります」

彫刻は日常の経験が次の作品につながる

「彫刻は日常の経験が次の作品になる。経験や年齢を重ねたことが如実に形になって表れると言

う意味で優れている分野だと思います」。自らの感覚の内側に思いをはせて表現したい「形」を掴むことができたときの充足感は何にも代えがたく、次の作品が見えてくるというのが面白いという。

「記号的なパターンでつくるバリエーションになるとつまらなくなってしまう。個展のためにとかニーズに照らしてつくと求められるものが決まってくるが、それに苦しめられるのは嫌なので教員でよかったと思います」

若い人へ、魅力があれば飛び込むべき

「まず、自分のために生きることだよと思います。誰にも遠慮はいらない。その人に与えられた環境が許せばその範囲で精一杯やればよ

い。魅力があれば飛び込むべき。チャレンジしないと絶対あとで後悔するので、しっかりと自己表現してわくわくすることに向かってほしいと思う。社会生活も避けて通れないが、自分がどうしたいかが明確であればということでも受け入れられる気はする。何をしているかもわからないで目の前のことに振り回されていると苦痛ですが、何をしたいかわかっていれば受け入れられます」

作品は見る人の経験に照らし合わせて見る

心に留まった作品を自由に見る。つくる人は経験のなかの感動をきつかけにして描いたり、つくったりしているので、見る人それぞれに、その人にとっての「あのことだ」というのがある場合もある。

作品は見る人の経験に照らし合わせながら自由に想像して見ればよい。形も色も題名もきつかけにすぎない。気に入って継続して見に行くようになればこつがいろいろとか、好きなものとか、この人こんなによくなったとかいう楽しみができてくるようになる、という。

「僕は二十一歳のときに初めて日展を見て、そのときが初入選でした。最初はたくさんあるなと思

田丸 稔

Minoru Tamaru

1968年、島根県松江市生まれ
1990年、第22回日展 初入選
1991年、岡山大学教育学部卒業
1993年、岡山大学大学院教育学研究科美術教育専攻修了
1995年、倉敷芸術科学大学芸術学部美術学科助手(彫刻コース)('01～'08 講師)
1996年、第26回日彫展 日彫賞受賞
1997年、第48回岡山県美術展覧会 山陽新聞社大賞受賞
2002年、第34回日展 特選受賞
2008年、倉敷芸術科学大学芸術学部メディア映像学科 講師(美術学科兼任)
2009年、倉敷芸術科学大学芸術学部メディア映像学科 准教授(現在に至る)
2006年、第8回岡山芸術文化賞 準グランプリ受賞
2006年、第38回日展 特選受賞
2014年、改組新第1回日展 審査員
2014年、「公募団体ベストセクション 美術 2014」東京都美術館
2015年、「都美セクション 新鋭美術家2015」東京都美術館
日展会員／日本彫刻会会員／岡山県美術家協会会員／岡山県美術展審査委員／倉敷芸術科学大学芸術学部准教授

寺山三佳

Mika Terayama

彫刻

「普通の若者で、女性、男性モデルと選ぶことなく制作をしていたら作品の比率が半分半分になりました」。女性をモデルにした具象彫刻が多い中、寺山さんは、中性的な細身の若い男性を具象彫刻で表現し、特選に輝いている。東浦和の住宅地の中にあるアトリエは、広々としたフローリングの部屋に制作中の作品のほか、さまざまな素材を使った作品などが並ぶ。寺山さんが現在に至る道のりには、一時、彫刻から離れたことなど、さまざまな出来事があった。

テキスタイルデザインを志した高校時代

寺山さんは富山県で生まれ、父親の仕事の関係で転勤を繰り返した。小学校は五回転校、小学校六年生からは現在の埼玉県さいたま市で暮らしている。

小さいときから絵は好きだった。「母は洋裁が

好きで、自分で何でも作る人でした」。そうした血を受け継いで、寺山さんもデザイナーやスタイリストになったかっただという。

高校では美術部。別府市で呉服店を営んでいた祖父母の影響でテキスタイルデザインを学びたいと漠然と思っていた。大学受験に失敗。浪人する女子学生も少ない中、当初は女子美の工芸を目指していた。そこには大きなサイズの織機があり、織物を学びたいと思っていたためだ。しかし、父親から「できれば国立を」と言われ、受験した埼玉大学教育学部に合格。自転車を通える地元の埼玉大学の中学校教員養成課程に入った。

大学で彫刻との出会い

そこから、運命の出会いが始まることになる。在学していた与野高校でお世話になった美術の清水先生が埼玉大学の市村緑郎教授と親しかつ

た。市村教授は与野にお住まいだったこともあり、与野高出身の寺山さんを気にかけてくださるようになった。

「彫刻はやったことがなかったのですが、好きな授業のひとつになりました。四年生の卒業研究で何をするか、陶芸か彫刻で迷ったのですが、市村先生がロダン大賞を受賞され、日展でも活躍されていたことなど、彫刻がさかんな学校だったので卒業制作に選びました」

「彫刻専攻は男性が多いと思われがちですが、同期の市村研は女性四人。石膏まみれのときも泥まみれのときも女性だけ。いつも市村先生は『好きにやれ』と言ってくださり、男性・女性のへだてなく扱ってくださったのが良かったと思っています」

大学院で橋本堅太郎先生に師事

大半が教員を目指すなか、ちようど教員採用

が厳しい時代で、何年も浪人する人もいた。高校で非常勤講師をしながら一年間教授浪人をして

いるとき、「大学院に行っても少し勉強しようか」という気持ちになった。埼玉大学には大学院がなかったため、市村先生に相談したところ、東京芸芸大学大学院の受験を勧めてください、合格。大学院で橋本先生に師事することになる。

こうして高校の美術の先生から始まり、彫刻を介して埼玉大学市村先生から東京芸芸大学の橋本先生へと繋がっていった。後に、芸術院会員になれる彫刻の先生方であった。恩師の指導もあり、大学院の二年間で二回日展に入選している。

一般企業に就職

大学院修了時、世の中はバブルの終わり頃。教員採用は相変わらず狭き門で、活気ある企業へ就職することにした。ちようど男女雇用機会均等法施行の頃、一九八九年に全盛期の西武百貨店に入ることになる。

大宮店の営業企画に配属され、猛烈に働く日々となり、気がつくと彫刻をやめていた。終電で帰ることも多々あった。しかし、数年後には、このまま続けてどうなるかと思い、転職することにした。普通に過ごせば良いと思い、花屋に転職。一九九三年のことだ。

彫刻家に戻る転機となった日彫会の選抜展

そうしたなか、ある転機が訪れた。日彫会の選抜展として、有楽町マリオンで首だけを集めた選抜展を行うことになったのだ。「以前、賞をたくさんいただいたので、『過去の受賞者から選抜ということでは出ませんか』という連絡を受けたのです」。

恩師の市村教授に相談したところ「やってみれば」と背中を押してくださいった。

七年ほどのブランクがあった。しかし、また彫刻をやってみたいという気持ちを、就職先の社長も理解してくださり、仕事と両立してまた彫刻を学ぶことになった。

一年間はリハビリ期間。二年くらい経って「そろそろ出すか」と市村先生に言われて日彫展に、そのまた一年後に「そろそろ出すか」と言われて日展に。今日まで落選したことはないという。

こうして、彫刻の世界へ見事戻った寺山さんであるが「彫刻をやめたときは、できないなという感覚で、このままやらなくなるのかな、と思ってた。また始めてみると、もう、彫刻をやらない気持ちは味わいたくない、ずっと続けることを考えたいと思った」と語っている。寺山さんにとって彫刻はなくてはならないものだ。現在も会社員、休日に集中して制作し、通勤時間が反省会の時間。作品を冷静に眺める時間も大切にしているという。



モデルとの組み合わせで 何をどう作りたいか考える

これまで数多くの作品を作られているが、好きな作品を挙げていただいた。

二〇〇〇年の「Seed 目覚めの予感」は、女の子が目覚める場所と種のイメージを重ねて作ったところが気に入っているという。

モデルはどのような人を選ぶのだろうか。



Seed 目覚めの予感 2000年 第32回日展

「モデルは知り合いとかで来ていただけの人をお願いしています。モデルさんから受ける印象は大切にしています」

モデルとの組み合わせで、何をどう作りたいか考えていく。以前作った作品の反省点を生かして次に臨む。

在学時代は授業なので、課題をどうやって作るかという制作が多かったが、その後選抜展に出すようになってからはオリジナルで作らなければならなくなった。橋本先生からは「何を作りたいのか。何故なのか。どうしてなのか」と質問を受けることが多く、それを言葉にしていく中で、「何もない感じを作りたい、すーとした感じのものを」と言葉で言えるようになった頃に二〇〇六年の特選をいただいた。

その次の特選が二〇〇八年「USUAL」である。今風の男の子。どこか優しい感じで何か普通つ



USUAL 2008年 第40回日展 特選

ぽい作品を作リたかったと語る。「細かったので、このポーズが出た。だるそうな感じ。女性像のほうが華やかでポーズが派手だったりきれいだったりにするのに比べて、地味かなと思っただけれど、『一懸命作って特選取れるときに取らなくては取れなくなる』と先輩に言われていたので、ただけでうれしかったです」。

制作しながら作品の変化を楽しむ

粘土で作っていく醍醐味をこう語っている。「最初はデッサンをし、イメージをどうするかを考え、制作しながら変わっていく感じ です。粘土自体が自由なので、思ったことだけを形にしていくと作品ができるのではなくて、こつちのほうがいいとか、気づきながらできあがっていく。あいまいで

それが楽しい。粘土で『何かを作っている』が、楽しくなっていくんです」。

現在は、枕木を使ったり、自転車を添えたり、鉄板や発泡スチロールを使ったり、作品の幅は広がっている。

二〇一三年の「抱く」は一二〇センチの高さの枕木に少年の像を乗せている作品である。作品が見る人を見下ろす彫像を作ってみたかったのと、少し傾いて不安定にすることで、縮こまって不安げな少年を想像させたかったという。角度は、最後に石膏取りをしてから決めた。

何気ないポーズに凝ってやっていたが、市村先生の『やりたいことをやってみる』という言葉と橋本先生の自分の気持ちや考えを突き詰める姿勢が

制作の原点となっているという。「見る人の経験や記憶に触れながら、自分の作品から何か一つだけでも伝わるというかなと思うようになりました」。

日展で受ける刺激を糧に

「日展には具象彫刻でレベルが高い様々な作品が集まるので刺激を受けます。公募展離れと言われていますが、発表の場として多くの人に見ていただける最高の機会だと思っています。また、彫刻は絵に比べて要素が少なく、人体で表現しています。女、男、ポーズしかないと思われがちですがそこにはいろんな思いが込められているので、できれば作者のコメントが載せられている『日展アート

ガイド』をご覧になったり、作者の先生方のお話を聞かれると、作り手の気持ちが変わって作品を深く鑑賞できて面白いと思います」

長らく彫刻をやめていた時期があるため、現在のライバルや活動を共にする人たちは若い人が多いという。そうしたなか感じているのは若い人たちのエネルギーだ。

「すごく面白いし刺激になります。一緒にやりたいし、日展は伝統もあるけど、若い感性を理解する先生もたくさんいらっしゃるの、若い人に出品してもらいたいと思う。また、就職して自分の生活が優先になっても、いつでも彫刻はできると思っ、いろんな意味でストレスを感じず彫刻を好きなままでもいいと思います」



抱く 2013年 第45回日展

寺山三佳

Mika Terayama

埼玉大学教育学部卒業 市村緑郎先生に師事
東京学芸大学大学院彫刻課程修了 橋本堅太郎先生に師事

2006年、第38回 日展 特選

2008年、第40回 日展 特選

日本彫刻会会員 日展準会員

友定聖雄

Masao Tomosada

神戸・三宮の繁華街を抜けて山手通りを渡り坂道を上り出すと、旧居留地が始まり、モダンな佇まいの住宅街とショップが並ぶ通りになる。坂道を一番上まで登っていったところに友定さんのアトリエはある。異国情緒豊かな環境のなかでガラス工芸が生まれていくのかと想像が膨らむ。

ガラス屋の息子として生まれて

一九五九年神戸生まれ。「東門筋の繁華街に生まれました。グレン・ミラーの音楽を聴きながら隣がキャバレーという環境です」という第一声に圧倒される。実家がそこにあったが、小学校一年で少し上に引越したという。

「ものづくりは性に合っていた。好きだったんですね。父は町のガラス屋でした」。自宅の一階が父親の職場でいつでもガラスがあり、慣れ親しんで

育った。高校二年でステンドグラスを志すが、当時大学で教えてくれる所は全くなかった。ガラスの世界といえば、ガラス工房に丁稚奉公に行くか、大手のガラスメーカーのデザイナーなど。作家はまだ少なかった。ガラスの先生が一人いた大阪芸術大学に進むが、うまく巡り会えず、それで平面をしようと思つて染色を学ぶ。

大学卒業時にガラス工房を探した。東京にも話があったが、大阪でガラス工芸の材料を輸入販売する会社があり、そこにアルバイトのように入った。ステンドグラスをやる人が少しずつ増えてきた。「働きながら一年三か月くらいたつた頃、独立し、見よう見まねで工房を作りました」。二十四歳の時だった。ガラスを扱うことには慣れていた。切れる。あとは平面デザインなのでこれは経験しかない。「自分でできる自信があつたのか、無謀でした」と笑う。

ガラス工芸そのものをやっている人が少なく、

阪神淡路大震災をきっかけに作家活動を

日展へ作品を出す大きなきっかけは阪神淡路大震災だという。当時、神戸の山を越えたところで工房を開いていたが、震災で仕事の需要がなくなり、継続的なプロジェクトもなくなつてしまった。それで父親の会社を手伝いに行つて凌いだ。ガラスが割れたという仕事はあるがぜいたく品としてのステンドグラスの仕事はなかった。そうしたことに無力感を感じる日々が半年ぐらい続いた。徐々に落ち着いてくると、装飾的な仕事や工芸など芸術が求められる部分が出てきた。

震災の当初、神戸の都心では、夜は真っ暗だったが、当時住んでいた北区に帰ると明かりがついていた。車で十分走ると全然違う。北区は被害がなくインフラもあり、パチンコ屋さんもやつていた。「不謹慎とは思いましたが光を見てほつとするとというのがあつて、光やあつたかいは人間にとって必要だと考えた時に自分にできるのはこうした仕事だと覺つたんです」。与えられたものを積極的に発信していきたい、という大義名分ができた。

それまでは日頃の生活を維持していくことで一生懸命やつていたが、何か作品を残していきたい、作家としてやつていこうと震災の年の兵庫県工芸美術展に初出品した。また勧められて日本現代工芸展に出して入選。次に日展に小さい作品を出したが落選だった。そこからは、自分の技法は特殊で他の参考がないのが強みと考え、二回目の出品からは落ちていない。

特選は雷にあつたような感覚で不安を感じた

最初の作品は全面研磨したものではなかったが、毎年、少しずつそれまでにない仕事を加え、前の作品をベースに積み重ねて今日の作品がある。

全く受賞すると思つていなかった特選を日展一〇〇年の時、四十七歳でいただいた。「雷にあつたような感じてした。うれしい反面、どうしようかと思ひ不安でした」。自分自身、作品が本当にいかどうかはしばらく時間がたたないとわからない。反対にこうしたほうがもつといいというのがみつかるとうれしい。狙つてしたものではないので、あとは好きなことができると思つて大きく形を変えたりチャレンジしてみた。前の特選からいろいろ工夫して一周回つてまた戻つて、五十六歳で二度目の特選を受賞。

振り返り「恵まれている面もありました。ガラス作家は少なく、やつたことがすべて初めての事で、固定観念に縛られる事がなかった。前例がないので辛い面もあるが自分がやつたことが全て自分のものになる。今のうちにやつておこうと実験したい気持ちもありました」。

作品制作は好きなものを突き詰めていく

作品制作の発想から具体的な形になるまでは、一時期コンセプチャルなことをまず第一に考えていたが、いつからか自分の技法と感性を優先し、手の赴くままアイデアを絞り出している。自

分の好きなものを突き詰めていくと自然に出てくる形の中に心象的なイメージがついてくる。紙にやりたいことをスケッチで描いてみる。角度が美しいとか緊張感があるということから始めて、同時に心象的なイメージをつなげながら作業をする。最初から絵を描く人のようにストーリーをあたためておいてというのではない。同時並行的だ



WIND II 2000年 第32回日展



が自然に自分ができる形をいれながらコンセプトが後追いしていく。

マケット（小さな模型）を作ることもある。そして紙の上で描くものとリンクしていく。スケッチを重ねる事で完成した立体も、長年の経験から想像がつくようになる。最終的に完全な原寸大の図面が必要になり、ガラスの寸法を割り出す。

「工業板ガラスを使っており、そうでないときでない仕事なんです」。接着剤でガラスをつけるため、工業板ガラスの完全にフラットな面でないとき接着面泡が出てきてしまうからだ。加熱し、溶着する事に比べ、接着剤を使用する事により、層がはつきりと浮かび上がる。またガラスは無色透明か少し色がついているか、グレーかで種類が限られている。

一カ月は朝から晩までブロックに分けて研磨する。三十ブロック仕上げてあとは積み木のように接着していく作業。しかし、最後の最後にガラスが欠けてしまったという痛い経験もある。

ガラス屋の父親からもらった接着剤が作品につながる

「いわゆる伝統工芸ではないですが、ガラス屋の仕事の延長線上です。工業板ガラスを平たく研磨するのはガラス屋でも行い、面取りや正確に切る技術があります」。〇・一ミリ単位の仕事で自然に接着する仕事だ。接着剤は、父親の仕事でケースを作るとき使ったもので造形作品のための

ものではなかった。「大学二年生のとき父からこういうのがあると言われて、造形の基礎の授業に板ガラスをその接着剤でつけて作ったのが最初です」。父親から教えてもらった工業ガラス用の接着剤が、友定さんの今日の作品の大きなヒントとなっていた。「ガラス屋だったからガラスの材料で作品を作ったんです。ガラス屋の息子だったからという自負はあります」。

「SAKU」から「MOONLIGHT」へ

思い入れがある作品としては二〇一四年の「SAKU」がある。この年に父親が他界した。「父は全部燃焼してカラカラで亡くなったけれど、その時ふわっと花が咲くようなイメージがして作りました。具象的な要素を入れて、大きく変えた作品です。翌年作ったのが『MOONLIGHT』です」。この作品は特選に輝いた。黒いガラスで月の明かりをイメージしたもの。

「父が亡くなった時に満月でした。今も満月が出ると父が何かを言っている気がします」

日展の懐の深さ

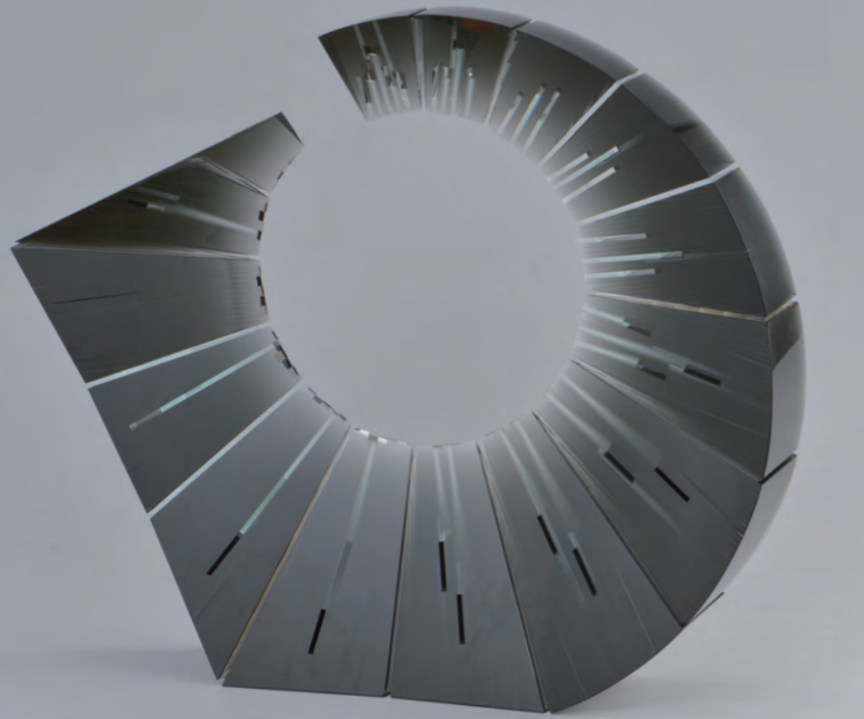
日展について尋ねると、「芸術は自由でいろいろあつていい、とんがつても地道な人がいてもいい。確実に日展の良さはそれ等を幅広く受け入れる包容力です。日展の存在が日本の文化の偏差値を上げています。ある意味、普遍的な美の中に伝統

くなる部分がある。時代に翻弄されないようにしつつ、工芸家でしかない新しい工芸美術の価値観があります」。

楽しくなければ芸術とはいえない

取材の日、友定さんは授業で学生四十人ほどに兵庫工芸展の列品解説をしたという。「なにより、作品を見せることが重要。『今回賞には選ば

れなかった作品は何故だかわかるか?』という授業。そこで学生は考える。ものとしては完成度が高くても賞をもらえない、商品的すぎるとか芸術性があるかないか。大学では自分で学ぶということを教えている。感性は教えることができないんです」。作家を目指す学生には「いろんな道があるので、ピュアに考えるなら、仕事は持つて作品は作品で作ればいい。それぞれの生き方で、基本的には楽しんでやってほしい。難しいことですが、楽

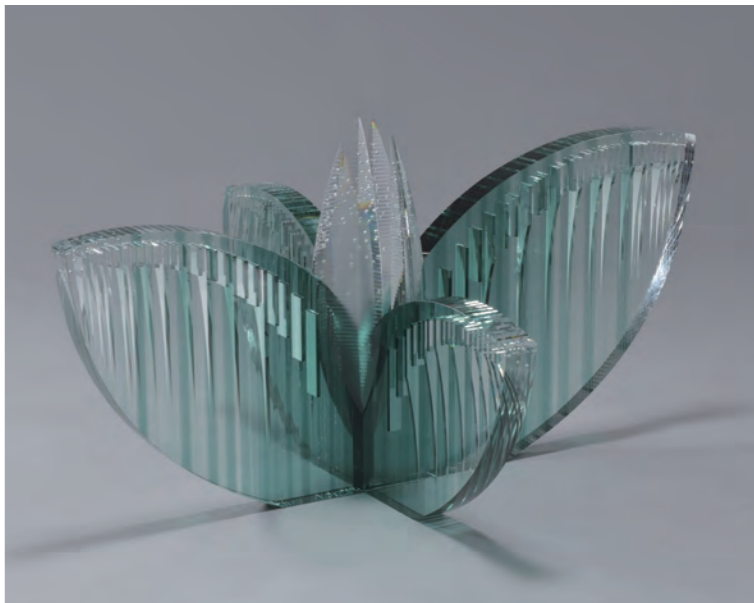


MOONLIGHT 2015年 改組 新 第2回日展 特選

友定 聖雄

Masao Tomosada

1983年、ステンドグラスミュージズ設立
1991年、関西ガラスアート展 大賞
1996年、兵庫県工芸美術展 神戸新聞社大賞
1999年、日本現代工芸美術展 入選（以後、毎年）
2000年、第32回日展 初入選。トマスガラスラボ設立
2004年、ステンドグラスミュージズ改め、北野町にトマスガラススタジオ設立
2005年、日本現代工芸美術展 現代工芸大賞。兵庫県工芸美術展協会大賞。(株)トマス設立。第39回日展 特選
2009年、平成21年度神戸市文化奨励賞受賞
2010年、第49回日本現代工芸美術展 本会員賞受賞
2013年、第52回日本現代工芸美術展近畿展 京都府知事賞受賞
2015年、改組 新 第2回日展特選
2016年、第55回日本現代工芸美術展 東京都知事賞
現在、日展会友、現代工芸術家協会本会員、兵庫県工芸美術作家協会副理事長、神戸芸術文化会議会員。
神戸芸術工科大学先端芸術学部クラフト・美術学科教授



SAKU 2014年 改組 新 第1回日展

を守りつつ、現代に息づく「美」を求めている。それに反して大きく変革を求めているのが現代の流行の芸術かもしれません。日展があるからできるのだろうと思います。そういう意味では日展も大きく変革し、また今もしようとしているのでしょう。僕にとつてはガラスでなおかつこんな技法で受け入れられた。特選を二回いただいたのは日展の懐の深さだと思います。

工芸の分野はそのもの自体が保守的で他の美術と違う。それは技術のウエイトが高いし、実際にプロとしてやっている人はふだん伝統工芸のなかで生きている人が多い。時代が変わっても急激な変化はできない。その価値観を失うと工芸でな

しくなければ芸術とはいえないと思うんです」。

「僕は運が良かったんです、目の前に板ガラスが転がっていて、それでなにか作りなさいと言われて。恵まれていたと思います。独立して社会のルールを学んで、ひたすら同じ仕事をしたり、やりたくないものもした、一人丁稚奉公が無駄でなかった。四〇歳でデビューして、それは年をとっているほうだがあらゆる面で恵まれていた。天に向かつてありがとうございます、というしかないです」

南正剛

Seigou Minami

旭川空港から車で三十分ほど、美瑛町に入る。緑の原生林の中に佇むきれいな黄色い壁の建物が見えてくる。「皆空窯」を構え、三十二年目を迎えた陶芸家の南正剛さんは、一年のうち約半分が寒さと雪との闘いになる北海道の、零下一五度から二〇度でなければ作り出せない文様の陶芸作品「氷裂」を生み出した。それまでには南さんが走り続けてきた壮絶ともいえる道のりがあった。折しも取材日はどしゃぶりで電も降り、大雨洪水警報が美瑛地域一帯に発令され、停電。アトリエの中は外から入るわずかな光のみであった。

世界各地を放浪した三年間

「札幌に生まれて国鉄サラリーマンの父をもつ僕の中に陶芸というのはなかったんです」
陶芸と出会うまでには紆余曲折がある。北海道の大学を中退して放浪の旅に出た。東南アジアやインドをメインに中東を回り、陸路で北欧、

工芸
美術

西欧、南欧へ。危険なこともあった。アフガンでクーデターと遭遇、ボーダー封鎖でホテルに缶詰めにされ、暗闇でパンパン音がしたりということも。二十三歳の頃のことだ。

「当時でいうヒッピーです。そういう時代でした。手持ちのお金は僅かで行く先々の街で働いたり、いろんなことをしながら、少しずつ旅を続けました」

インドで助けられた妙法寺と 焼物との出会い

南欧を回り最後はインドに戻ってきたが、肉体的経済的に落ち込んだ時に助けてもらった先がある。それが日本山妙法寺という寺だった。そこでしばらく回復するまで過ごし日本に帰れることになるが、その時、ヨーグルトを入れていた器に「これはいいな」という印象があった。日本に帰ってきて「これかも知れない」と思ったのが焼物の世界

に入ったきつかけと振り返る。

出発から三年後、札幌に帰って焼物屋を探した。笠間などの窯業地に行っていた陶芸の職人さんに相談したところ「まっさらの人が焼物の世界に入るなら、色々な焼き物を知った方がいい」と言われ、京都、瀬戸、多治見の訓練校などを教えてもらった。

瀬戸の陶芸専門学校で学ぶ

そのなかで一番はまったところが愛知県立瀬戸窯業高等学校陶芸専攻科だった。二十六歳から二年間通い、陶芸のほんの一部を教わったという。「印象に残っているのは当時バリバリの作品を作っておられた加藤清之先生。又加藤唐九郎先生は健在で息子の重高さんの工房でお話を聞かせてもらったりもしました」

奥様は焼き物屋の先輩で瀬戸に七年いて最後

の二年間が一緒だった。既に独立して工房もあり、そちらを使わせてもらい、そこからはぶれずに作陶に打ち込んだ。人よりもスタートが五、六年遅れていたため寝る暇を惜しんでやっていたという。

「学校の授業だけでは僅かしか時間がとれないので放課後『帰ってくれ』と言われるまで夜も粘って、いかに焼き物を身につけるかを考えてやっていました。卒業後も二年ほど、いろんな先生の技を盗みたいと思って瀬戸にいました」。担任は後に金沢美大の学長をされた久世建二先生で、通い詰めるながらオブジェとは何かを学び、中村梅山さんの三男の康平さんが窯業科にいて「自分も焼くから貸してほしい」ということで、十五キロの電気窯の購入費を出資してくれた。それまでは共同窯を借りて焼いていたのだ。人にも恵まれた。

「皆空窯」は、瀬戸で奥様と二人で立ち上げた。「僕はインドやネパールを旅し仏教と出会った、彼女は色々な仏様を作っていたことから、共通項として仏典の「般若心経」の一言を貰って皆空窯とつけました。形有る物は生まれたと同時に朽ちていくことの繰り返し、人も焼物も同じです」

当時は、グループ展や「四季の味」という季刊専門雑誌で扱ってもらえるようになり、作ってはデパートで展覧会を開いたり営業を行いました。高度経済成長の中、「手作りのお店」が増えていき、関西・東京エリアだけで五十軒と取引をし、皆空窯は多忙を極めた。

北海道、美瑛で自分たちのブランドを作る

こうして瀬戸で販路を開拓した後、もっと広い工房を求めて、縁とタイミングがあった北海道の美瑛に「皆空窯」を移したのは三十一歳の時。結婚と同時だった。テレビで「北の国から」を見ていたというもある。

本人は陶芸家として出遅れているという頭があり、さらに仕事をしたと振り返る。次々人を雇い借金をして事業を展開。夢中でやるしかない。「自分達のブランドをきちっと作り上げなければ」という強い思いだけがあった。

富良野に住む脚本家倉本聰の テレビドラマの舞台に

「時代が僕らを生かしてくれたというか、人も雇えたし借金も返せたし、そういう形で展開したのと同時に、脚本家の倉本聰先生が富良野に住まわれているのですが、先生のドラマに窯が取り上げてもらえたのが大きな契機になりました」

南さんが美瑛に來た前年に倉本氏は富良野文化村にアトリエを建築し居住、たまたま設計の先生を通じて知り合ったという。皆空窯は倉本氏の富良野三部作「北の国から」、「優しい時間」、「風のガーデン」の中の「優しい時間」のロケ地になった。二〇〇五年に放映されたテレビドラマである。「先生が『おまえたちを十五年ほど見ていたぞ』とおっしゃってくれて、うれしかったし逃げ出さなくて良かったと思いました」。





Scratch vase 1989年 89金沢工芸大賞コンペティション奨励賞



氷裂2015 2015年 改組 新 第2回日展特選

一九八九年金沢工芸大賞奨励賞。 日展は一九九四年から

一方、コンペへの出品も積極的に行った。一年に十三回出品したこともあった。

「四十五歳までは仕事に興味のような感じでした。

子供と特別にどこかに行ったということはなく、三度の食事以外はアトリエで過ごす毎日でした」

思いつに残る作品は一九八九年金沢の工芸大賞の奨励賞受賞作。素材の質感を求め、焼くことで土味をより表現したいという時期から、手を加えたものを増やしていきたいという転換期に得られた賞だった。

氷裂——北海道で焼物をやる意味を 探って出た答え

一九九四年が日展初入選。それからは日工会、日展と年に二回出品してきた。その後倉本先生脚本ドラマ「優しい時間」放映の影響などで多忙を極めた時期があり十年ほど出品活動ができなかったこともあるが、二〇一一年に再開した。

改組新日展になって二〇一五年に「氷裂」で特選を受賞。「氷裂」とは、厳寒期の野外で釉をかけ、その後釉薬中の水分が凍ることできた文様をそのまま焼き付けて生まれた器であるという。本来、焼き物屋の条件として北海道の気候はマ

イナス。ものは凍るし寒い。しかし、この寒さを逆手にとつてできた作品だ。きちつと文様が出るまでに試行錯誤を繰り返してきた。

「それまで作ってきたものはどこか自分でないようなところがあった。「厳寒の北海道の地で焼物をやる意味は何か」という問いがあつて、これはストーンと落ちた感じですよ」

しかし、失敗も多く狙い通りのものはなかなかできず、焼いて窯を開けないとわからない。温度が五度違うだけで、同じように釉薬をかけていても色合いから何から表情に違いが現れてくる。また工程がたくさんあるので、何年も作り続けているものもある。出品作品は、ずっと構想を練りながら形にしていって、最終的に氷裂の時期にかける。

五点かけて、そのうちの一点がうまくいくかどうかだ。冬の気候でマイナス十五度から二十度で雪がなく無風の環境、この条件をクリアするタイミングはそれほどない。

日展の特選受賞によって、NHKが氷裂の制作風景取材し、全国放送にもつながった。

苦勞を乗り越え作品ができた喜びを

南さんにとって日展は、よい刺激であると語る。「日展は緊張感があります。試行錯誤しているときに日展の先生方にお会いして話を聞いたり作品を見たりできると、答えや方向性が見えたりということがあるので、自分にとっては年に一度のことですが、刺激があつてありがたいです」

若い人へのアドバイスを尋ねると「苦勞が多いことや現実的な厳しさはアートをやっていればみな同じではないでしょうか。こういう世界は自分を見つめるというか、しんどい思いをすることは多いけれど、乗り越え作品ができた喜びは何物にも代えがたい。若い人もこういう世界で頑張つてほしいですね」。

「このような「日展」との関わりが自分を育て、新たな創作活動のモチベーションとなっていると確信しております。この体験を通して感じた刺激や喜びを地域の子供達に伝えたく、四年前より北国発「こども陶芸展 in びえい」を企画し未来の陶芸作家誕生を夢想しております。今後はもう少し日展の先生方のお力をお借りして、「こども



化一03A 2003年 日工会展

陶芸展」をきっかけに日展の先生方の展示会を北海道でできればと思つています」

今後について尋ねると「文様の入り方、入らせ方、自然の現象に自分がどこまで関わつていけるのか、氷裂をまだしばらくやりたいと思つています。寒くマイナスな冬の期間にこうした待ち遠しい仕事を持てたのは自分にとってラッキー

だったなと思います。これまでただただ走ってきました。将来の生活、理想と現実のギャップに悩んでいましたが、いろんな人がいていろんな生き方があつていい。ある時期まできたら気持ちが楽になつた。自分たちの生活のスタイルでこれからもやつていこうと思います」。南さんの瞳は輝いている。

南 正 剛

Seigou Minami

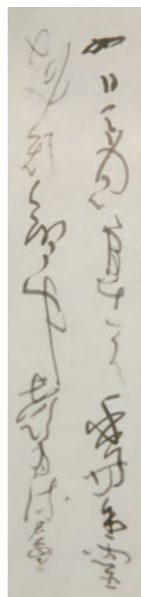
1952年、札幌市生まれ
1972年、大学中退後日本各地、インド、中近東、ヨーロッパ各国遊学
1981年、愛知県立瀬戸窯業高等学校陶芸専攻科卒業 瀬戸市に「皆空窯」開設
1983年、北海道美瑛町白金に「皆空窯」を移す
1988年、第35回日府展全国区新人賞
北海道クラフト・グランプリ優秀賞
1989年、'89金沢工芸大賞コンペティション奨励賞
1990年、北陸中日美術展商工会頭賞
1993年、第3回日工会展受賞
1998年、第7回日工会展企画展示特別賞受賞
2003年、雪のデザイン賞展奨励賞 '04奨励賞
2015年、改組 新 第2回日展特選受賞
現在、日展会友、旭川デザイン協議会会員

書

書家・日展会員

佐々木宏遠

Koen Sasaki



韻 1976年

京都から近鉄電車で二十分ほど。宇治市の書家の家を訪ねた。三階のアトリエには、さまざまな種類の筆、和綴じの書物も並ぶ。良寛、空海の言葉などの好きな書が掲げられている。「ここは弟子さえ通したことのない場所なんです。孫は覗いたりしていますが」と最後におっしゃった。神聖なるアトリエに通していただき貴重なお話をうかがった。名古屋出身の佐々木さんは書家でありお寺の住職の家に生まれ、京都の大学を出た後、実家の住職を継ぐか、書家の道を進むかの選択を迫られた。

名古屋の寺に生まれて

「本格的な書との出会いは京都へ来てからです」。父親は名古屋で書道塾の先生と小学校の教員、そして浄土真宗の寺の住職をしていた。家は名古屋の街の中央にあったが、戦後の名古屋は焼け野原で、百メートル道路ができるために立ち退

きがあり、寺は覚王山に移った。佐々木さんが生まれる一年前のことである。きちんとしたお寺にするために、父親は三つの仕事をこなし、子供の頃、気が付いたら筆を持たされていたという。周りにも仲間や先輩後輩がいて、幼稚園から始め、小、中学校では競争しながら字を書いて、神社の展覧会や競書大会に出したりしていた。中学はマノモス中学で一学年八百人、十六クラスもあったが、あるとき書道の学年代表に選ばれ市の大会に出ることになった。「学年で二人。私が佳作でもう一人の女子が金賞をとった。それがくやしくて、これではいけないと高校に入ったが書道部はなく、もつと書道を極めたいと思っていた。

大谷大学書道部の同級生に連れられて師との運命の出会い

その後、浄土真宗の寺を継ぐべく大谷大学に入

学。真つ先に書道部に入った。「父は京都で書を習うのに大賛成でした。そして同級生で一人書けるやつがいたのですが、今の家内です」。聞いたところ、日展で活躍されている先生に習っているという。「是非、習いたいんだけど・・・」と頼んで、古谷蒼韻先生のお稽古場の部屋の隅で見させていた。書く機会を得た。その後、何とか、古谷先生に師事することになる。「次は何か書いたの持ってくるよう言われまして、先生は最初、優しくほめてやる気を出させるようなことをおっしゃった。その後の厳しさは尋常でなかったです」。一回生の秋に初めてお邪魔して、二回生の二十歳頃には京都大阪などの展覧会に出始める。三回生のときに先生

から「勉強してみるか」と言っていた。日展の入選は遠い話かもしれないが挑戦するのはいいのではないか、勉強の場として最高峰だからという話があつて友人と顔を見合わせて「やってみるか」と始めた。しかし思わぬ世界が待っていた。

父からもらった五年間の執行猶予と初入選

一年目二年目、落選が続き、三年目の正直と思つた卒業の年、父から「お前帰ってこないのか」と言われたのだ。「もうしばらく京都で勉強させてもらえないかな。書も本格的な勉強になつてきたので日展入選も夢ではないかもしれない」。卒業で二十四になる。「五年のうちに目が出なかつたら帰って寺をちゃんとやります」ということを約束した。「学生時代と同じように仕送り支援してやるから頑張れ」と言われ、五年間の執行猶予を父からもらった。ありがたいことに友達が三十人ほどの書道塾をやつていて、東京に行くので子供たちの面倒みてくれないかと言われて、そこで教えたりしていた。

すると、大学を出た年に日展に初入選した。父親はひっくり返るような喜びようで、本人もびつくりで、御所の南にある稽古場からの帰りは気持ちが悪く落ちて、とにかく御所の中をうろろして下宿に帰った思い出があるという。

初入選の作品は七十字程の万葉歌だった。それまでは十七世紀の中国の華やかな時代の書を勉強していたが、「君、和様の世界をやってみる

か」と言われ、「横の作品で万葉の歌を少し柔らかな墨で、薄茶色の唐紙に書かせていただいて、心地よくていい世界があるなと日本の文学を題材に日本の書をベースに書くのがうれしくてうれしくて。我師がそういう方向の勉強をされていたのでそれをしっかり自分のものにした」と、万葉の世界に入ったわけです」。

師のいいところをまずは学ぶ。この線はこの筆でこの墨でこういう表現をするという技術の鍛錬。そつくりにするテクニクを身に付けようとひたすら師の書を盗もうとしていたという。

「実は前の年に家内が初入選していました。書でも先輩。書の本格的な道も、恩師を紹介してもらったのも家内。未だに頭が上がりません。初入選が先で、それがくやしくて、中学時代を思い出して、この年は頑張りました」。

空海の三十帖冊子から字集めした師の学び方を学ぶ

あるとき、師から書の学び方を教わる出来事があつた。「わしはこういう勉強をしている」と、ご自宅の二階で空海の三十帖冊子を見せられた。穴だらけで、本を切っている。同じものを二冊持つていて一冊は切つてそれを自分の書きたい詩に字集めて。切つて貼つて、そこが創作の第一歩だと言われた。「空海との出会いにも感動し、師が勉強している方向も学びたい。どう学ぶかを学ぶのが大事ということを教わりました」。



昔から達人になった人はみなそういう勉強をしてきた。「手本をもらってそのものを書くのはお習字の延長で、自分でどう学ぶか、何を学んでどうなるかは自分自身をみつめて鍛え上げていく勉強なので、人としても大事だし、書の道は本来そうあるべき。そうすれば自分が目指すところ、自分の個性が花開く芸術の世界に至ることができるかもしれない」。

落選から学ぶこと、新たな旅立ち

連続二回の入選の後、落選した。二度目の入選作の後追いの作だった。こんな風に書いたら何とか入選するだろうという安易な書作がつまずきの元だった。常に新しい何かを求め続けなければいけないと感じた。一作一面貌なのだ。作品の新たな挑戦の第一歩となった。真似ることから盗むことへの変化でもある。三度目の入選作は思い出深い分岐点となった。

特選までの道のり

木簡、王羲之、空海、和様

次の、特選への道は苦しいものとなった。「師は何もおつしやらない。いろいろな意味で、作品が自分の思うようにならず苦しんでいた時期でした」。次はどういう方向で発展させていくか。途中から、日本の草書の原点を探ろうと一番の元である二千年前の中国の木簡、その中でも章草を勉強した。漢の時

代に細長い木の札に書かれた書である。木簡から王羲之に来て、それが日本に伝わった平安時代ということで十年以上学んでから和様に戻ろうと思ったが、きつかけが自分の中でつかめなかった。暗黙の時代。もつとやつたほうがいいのかという迷いもあった。そうして、学んできたさまざまなものが融合されながら形になった書が、特選として認めていただけた。

良寛の世界に入っていく

作品を書くのは、一瞬、であるという。

「気持ちが入っていないとだめで、締め切りまでの間にどれだけ自分を高めて、集中力が出てこの一枚が書けるか。その一瞬を高めるために何か月間かを準備としてやるわけです」

日展の作品については、「二、三十年はずっと万葉集の歌を素材にしていました。和歌ですが漢字が原文で、一語一語、漢字の原文通りに忠実に書く。鉛筆で下書き原稿をつくり、全体の雰囲気や自分なりに考えて、どんなところにどんな文字がどういう表現で納まるか、デッサンを行う。四千字百首ありますから、自分で文字数やテーマを作り探りながらやっていきます」。

今年は少し新しい方向でと考えている。「そろそろ和様の世界でも江戸時代、本阿弥光悦、良寛などの大好きな書の達人がいるので、良寛の世界に少しずつ入っていけたらなど。そのきつかけになるものが今年できればと思っています」。

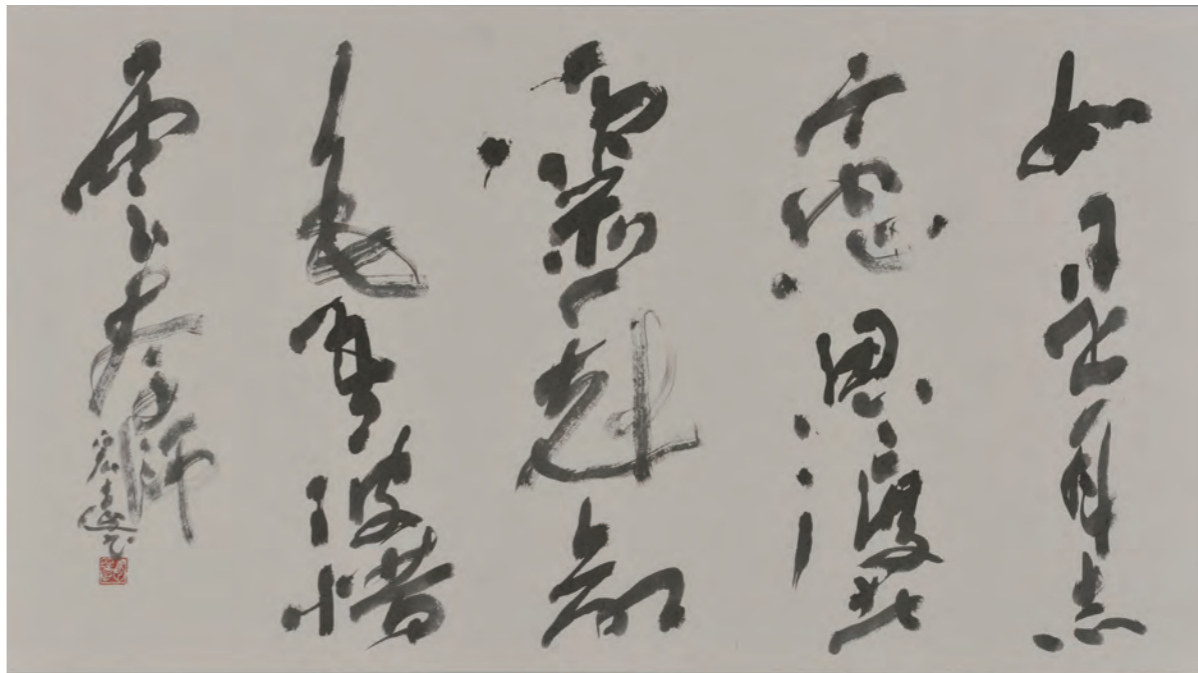
書を通して日本の文化を知ってほしい

「若い人に日本の漢字かな文化を大切にしてほしいと思います。そして多くの方に手書きの書、墨の薫りを感じて日本の文化を味わってもらうチャンスを生活のなかに多くもってもらえるようにしていただきたい。書は中国が元ですが日本で発展しています。読めない、難しいの前に、感じていただくことです。墨の匂い、白と黒の単純な世界ですが、そこから日本の歴史、日本の文化を感じていただきたいですね」

時代の流れ、風を感じる書

「名古屋の寺は弟が継ぎました。帰らなかったのも值遇の師の出会いがあつて、書ができるのを父が喜んでくれたからです。京都は歴史を感じながら歴史的な場所でお稽古をすることも多々あります」。

そうした中、「風を感じる書」というのは一つのテーマです。かつて「風月同天」という言葉がありました。奈良時代、長屋王が鑑真和上に送った千の袈裟に刺繍された詩で鑑真が日本に来るきつかけとなったものです。『山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結来縁 中国と日本は遠く離れているけれど、中国の空を吹く風はやがて日本にたどり着く。中国の夜空にかかる月は、日本の夜空にかかる月と同じ。だから遠く離れていても、中国と日本はつながっている。ともにご縁を



如是 2013年

結びましよう。(西山厚著「語りだす奈良 118の物語」より)『という詩です」。

風の中には、描き手の心や時代の流れという意味があるという。伝えていく力は風が大事で、これからも風を表現し、風を学んでいきたいとしている。

佐々木宏遠

Koen Sasaki

1949年、名古屋市生まれ
1969年、古谷蒼韻先生に師事
1973年、日展初入選
1982年、日本書芸院展大賞受賞
1984年、読売書法展読売新聞社賞受賞
1986年、読売書法展読売新聞社賞受賞
1991年、1998年、京展審査員
2004年、日展特選受賞
2006年、日展特選受賞
2008年、山紫会書展(京都高島屋美術画廊)第一回展より出品
2013年、日展審査員
2015年、京展審査員
現在、日展会員、読売書法会常任理事、日本書芸院常務理事、京都書作家協会事務局長、宏志会主宰

吉澤劉石

Ryusetsu Yoshizawa

書

黄金の信長像が置かれた岐阜駅を出て車で街中へ入ると、町の中央には長良川が流れ、やがて遠く山の上には岐阜城が見えてくる。自然豊かな岐阜の住宅街に吉澤さんの教室がある。書家の吉澤さんは長年、大阪の高校教師を経て岐阜の大学で教鞭を執り、現在は、子供から大人まで書を指導しながら書家として活動されている。書道教室の奥の部屋で魅力あふれるお話を伺った。「ここで特選の書も書きました」と言われ、一瞬緊張感が走った。書は、一回の勝負で気持ちを含めて書く。その神聖な場所でのお話である。

漢字の書家の家に生まれて

吉澤さんは、茨城県久慈郡の書家の家に生まれた。父親（吉澤鐵石）が漢字の書家であり、幼少より書に触れて育ち、自然に書を目指すようになった。日展は常に目標であり、男兄弟四人の三

人までが日展作家として作品発表を行っている。（兄・石琥 特選一回受賞、弟・鐵之 日展会員・会員賞受賞）。父親と兄弟は漢字作家であり、吉澤さんも元々は漢字を学んでいたが、親の勧めもあり、仮名を目指すことになった。

伊藤鳳雲先生に仮名を習う

大東文化大学では教員の免許を取得し、卒業後、大阪の私学高校に勤務。二年目からは、日展の理事で芸術院賞をとられた伊藤鳳雲先生に師事する。大阪の心斎橋に稽古場があり、先ずは『いろは』からの学習と『関戸本古今集』の臨書を勉強した。しかし入門してすぐに日展への挑戦を始める。「良い作品を書きたいと思う心が上達の秘訣だ」と思っていました。

先生とは三十六歳の年齢差があり、いつも緊張の連続だった。最初はお手本をもらっていたが、

言って病床の父からもらった手紙に衝撃を受けた。若い頃、父が書いた仮名文字が真つ赤に直された手紙だった。

「親父も仮名を習っていたことがわかりました。戦後、日展委嘱までなった村上翠亭先生のところ

に自分が書いた仮名書を送って返されたもので、しかも当時は紙が貴重だったので広告の裏紙も使っています。父は、兄弟のうち一人くらい仮名を習わせたかったのでしょう」

かつて大学一年の時に父に出した手紙が真つ赤に直されて返ってきたこともあるが、父の手紙が何よりの宝。もともと画家になりたかった父は仏像のような絵も手紙に描いている。時折出して読むといつまでも生きている存在になる。病床の父へはこちらからも毎日ハガキを出していたという。

「親があつたから我々がある。父が亡くなってからは兄弟三人が『十一月に上野でまた来年逢おう！』が暗黙の合言葉となりました。現在吉澤一家では兄、兄の長男、弟、弟の長男と嫁、私と私の家内。全部で七人が日展作家で、吉澤一家七人全員が展示されることを念じています」

活字から鑑賞できるものを作っていく

ある時、仮名の作品の中に甲骨文字の（鹿）を入れ、「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の…」という作品を書いたという。

「先生にお見せする時に勇気がいりましたが、先生は『面白いよ。日展等では発表できないが社中展なら面白いと思うよ』一言そうおっしゃいました。思わずニンマリとし、汗がひいたのを覚えていいます。日展には伝統ある仮名の姿を主とした表現を心がけることだということも痛感したのです」

ある日、「今日から手本を書かないから自分で勉強してきたものを持ってきなさい」と言われ、書に対する情熱がさらに高まり打ち込むことになったと振り返る。苦しかったがうれしかった。

「最終的には自分の字を書きたいというのが書を勉強する人の目標です」

入選できない年が続いたが、その悔しさがステップになっていった。また兄弟で漢字と仮名の違いがあるが切磋琢磨してきた。

「日展の初入選は、先生の門を叩いてから八年目でした。飛び上がるような喜びはいまだに覚えています」

それから三年後、兄弟三人と父とを合わせ四人の作品が日展会場に同時に展示されたこともある。

病床の父からもらった手紙

日展で入選して二年目に「おまえに見せる」と

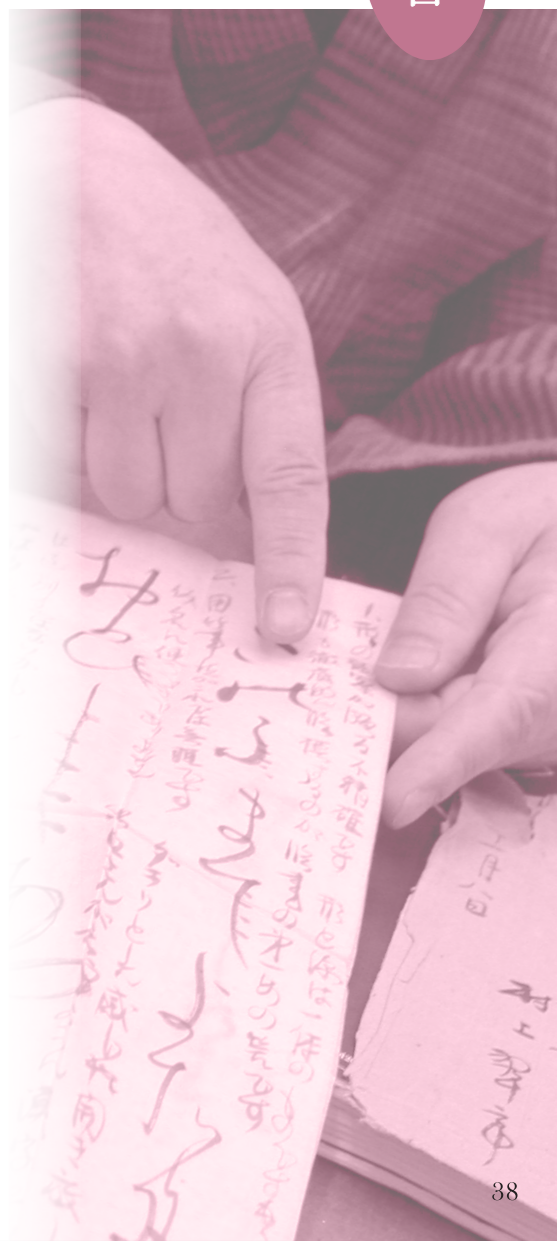
特選への道―日比野五鳳先生

「日展に出す作品は『古典に立脚した格調高い書作品』が基本姿勢です。二回の特選は共に『関戸本古今集』をベースに、日比野五鳳先生の作品の力を借りての表現でした。今年の作品もさらにその姿勢を中心に制作しています」

日本芸術院会員の日比野五鳳先生は岐阜の生まれで近くに美術館もあるが、昭和の書の三筆と言われる存在。品、格調、そして風合い、味わいがあり、先生が万葉集を百首選んで書いた本を切つてばらばらにしていつでも見れるようにして、美しさ、線、墨、形、余白を生かすために黒をどうおくかを勉強する。また、自分で文字の見本の辞書も作った。昔の格調の高いものを真似て学んで作品として発表していく。そして毎日紙の裏表全部に書いて、書いたものを積み上げていく。作品ばかりではだめで基本を学ぶと「よし」という自信がつくという。

特選の後は、常に感覚を落とさないよう心がけて

「特選をいただいても恥ずかしい所があります。これが最高だと思った時点で終わり。次を考えていくためには常に栄養補給をする。常に泳いでいないとマグロは死んでしまうので、まさにマグロになった気分です」と語る。特選をいただいてから周囲の見方も変わったし、自分自身の気持ちが変わった。特選をいただく前以上に筆を持っている。



毎朝五時前後に起きて臨書する。常に何かをしていないと落ち着かない。紙と筆に慣れて感覚を落とさないことを心がけているという。

臨書を繰り返す

近年の作品制作は草稿作りに時間をかけ、臨書を繰り返し、その合間に作品を書く。

「墨を準備しておき、勉強する中でヒントを得たらその力でずっと書く。昔は同じものをたくさん書いたが最近は書かない。情性になつてもだめで気持ちと手、感覚が乗って、それが一体となつたとき、古典の力、先人の力を借りて自分の思い、こう仕上げたいという気持ちで書きます」

一瞬ですべて三十一音を決める。一枚の紙にすべてのものを凝縮して書く。

「書いては壁に貼って、最近はスマホで撮影して持ち歩いて眺める。逆さや横にしてみる。最初に書いたものが良かったということもある。新鮮さがあつたときと慣れたときの書き方は違うので、それは絵画とは違うかもしれません」

仮名の魅力 線、墨、形の三要素

「書には、線、墨、形の三要素があります。線の太い細い強い弱いの変化、墨の多い少ない、濃い薄い、位置関係、形の大きい、小さい、複雑な形、簡単な形などをミックスして書く。字を書かない白の部分があるのは日本独特の仮名の世界の美しさなんです」

仮名は絵画的な世界や立体的な性格ももっていて、行のゆがみ、ゆれが心地よく響いてくる。そういった仮名独特の繊細さがあり、仮名は日本だけのもの。中国の漢字は文化遺産になつているが、仮名はそうではないので、いま登録しようという動きもある。

日展は書のなかでも漢字、仮名、篆刻、調和体がある。鑑賞にあたっては、何が書いてあるかではなく、絵画的な鑑賞姿勢で作品に触れていただと理解が深まるという。

「見て感じて、線や墨の変化を見て、全体の雰囲気を見て、その姿勢での鑑賞に慣れてから、作品の内容や制作者の心情などに入っていけるのが良いのではないかと思います」

本物の作品を見る

また、見方、鑑賞眼を養うために常日頃から目を高揚させることが大事と語る。富岡鉄斎の手紙や本阿弥光悦の手紙などが部屋に飾られている。また本物を書くと思うと、墨や筆も紙も惜しげなく使うという。

「その緊張感と書きあげたときの安堵感がなんともいえない。陶芸で窯を開けたときの瞬間の喜びと同じなんです」

数年前、師が勉強した王羲之の「淳化閣帖」を、その気持ちで乗り移ってくれないかともらってきました。もつと勉強しなくてはいけない。書以外では絵画や陶芸も一時学んだことがあり、司

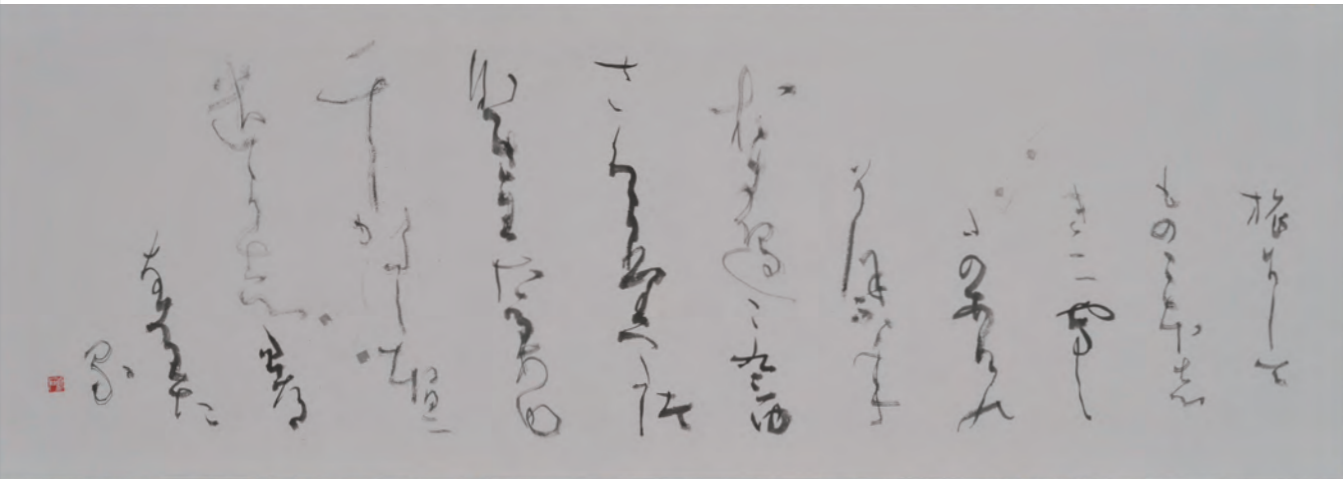
馬遼太郎など歴史ものを多く読みます」

これからの若い人へー高い目標設定を

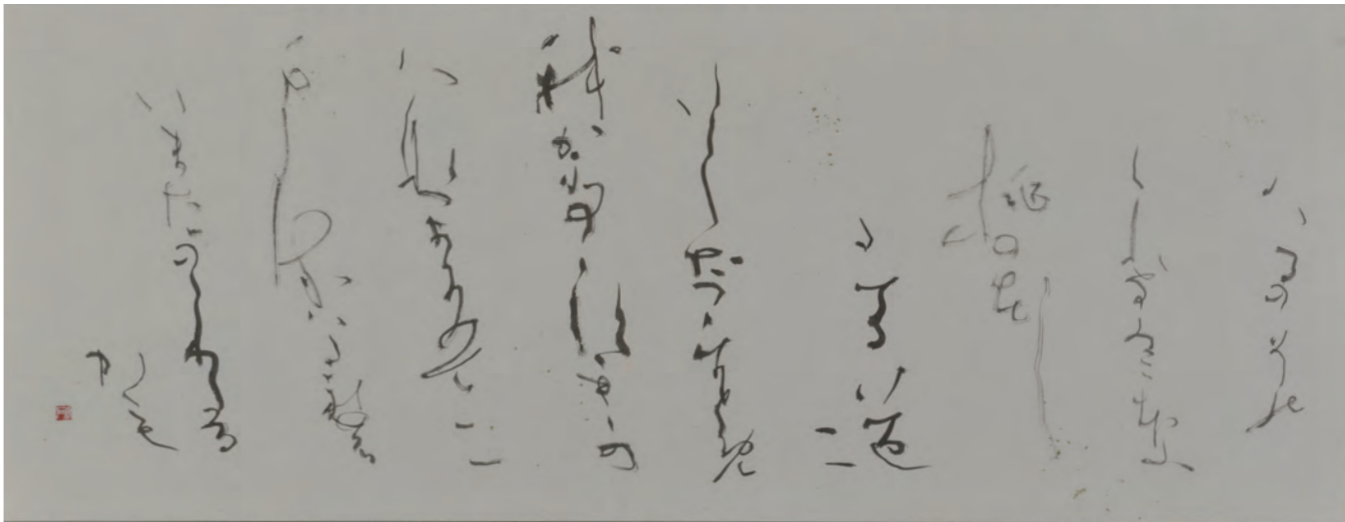
「とにかく目標は高く持つことと思います。年賀状を書ければという目標の人は結局年賀状が書けないで終わることが多い。より良い作品を書くという信念を持ち制作に臨んでいる人は、日展入選は通過点に過ぎないという感覚になるかと思います」では、より良い作品とは一体何か。

「温故知新の精神を持ち、伝統をふまえながら、新しい息吹を感じさせつつ、格調高く、一人でも多くの方に鑑賞、評価され、未来にまで受け継がれていくような作品。その理想に向かつていくという姿勢が大事ではないでしょうか。表現は書くこと。いろいろあつて十人十色でそこに文字文化の普遍性がある。終わりがいいですね」

緊張感の中で書き上げ、一枚の作品ができるまでの厳しい道のりを垣間見させていただいた。



旅懐 2015年 改組 新 第2回日展 特選



桃李 2012年 第44回日展 特選

吉澤 劉石

Ryuseki Yoshizawa

1952年、書家吉澤鐵石の二男として誕生。
現在、兄石琥・弟鐵之の三兄弟として書壇で活動中。
1975年、大東文化大学文学部中国学科卒業、同年4月高等学校書道教員として大阪で勤務。1977年、伊藤鳳雲先生に師事。1984年、日展初入選（以降特選受賞まで28回入選）。1992年、読売書法展 読売新聞社賞受賞。1993年、日本書芸院展 第1回史邑賞。1999年、岐阜女子大学教授として2011年まで勤務。2007年より2010年まで中国杭州市・中国美術学院にて日本仮名書法の講義を毎年行う。2011年、岐阜女子大学を退官し、書家として4月より月刊書道誌『創』を発刊。2012年、第44回日展にて『桃李』特選受賞（1回目）。2015年、第32回読売書法展にて準大賞受賞。同年、改組 新 第2回日展にて『旅懐』特選受賞（2回目）。

現在、読売書法会常任理事。日本書芸院常務理事。千草会理事長。中部日本書道会 評議員。岐阜県書作家協会 常任理事。かな研究・いづ美会主宰として月刊書道誌「創」発行。

日展会期中のイベント ― 日展をより深く楽しむために

会期中の土日を中心に講演会や映像による作品解説会を開催します。
また、親子で鑑賞と制作を行う教室、日展作家が自ら作品解説を行う各種ギャラリーでの鑑賞会があります。
日展をより深く楽しむためにぜひご参加ください。

講演会・シンポジウム・映像による作品解説

場所:国立新美術館3階講堂(入場無料)

10月29日(土) 午後1:30-3:30 ※途中10分休憩
映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者
「土屋禮一と新入選者による作品解説と座談会」 土屋禮一 今年度新入選者

10月30日(日) 午後1:30-3:30 ※途中10分休憩
「今年の受賞者と作品の紹介」 今年度審査員 今年度受賞者
シンポジウムによる討論会「日展の洋画」 藤森兼明 佐藤 哲 今年度審査主任

11月3日(木・祝) 午後1:30-3:30 ※途中10分休憩
シンポジウムによる討論会「彫刻を語る」 柴田良貴 西村祐一 伊庭照実 小西徳泉 宮坂慎司
映像による作品解説「彫刻」 佐藤敬助 寒河江淳二 一鉄田 徹

11月5日(土) 午後1:30-3:30
特別講演会「日本人のわすれもの」 京都市立芸術大学名誉教授 中西 進氏

11月 12日(土) 【日展の日】 午後 1:30-3:30 ※途中10分休憩
シンポジウムによる討論会「日展の工芸美術は何処に向かうか」 武腰敏昭 春山文典 大樋年雄
映像による作品解説「今年度の受賞者が語る ― 2016年日本の工芸」 今年度受賞者

11月19日(土) 午後1:30-3:30 ※途中10分休憩
シンポジウムによる討論会「日展の書」 星 弘道 土橋靖子 中村伸夫 和中簡堂
映像による作品解説「書」 市澤静山 師田久子 真神巍堂

11月23日(水・祝) 午後 1:30-2:30 映像による作品解説「工芸美術」 今年度審査員
2:40-3:40 映像による作品解説「日本画」 加藤 晋 佐々木 曜

11月26日(土) 午後 1:30-2:30 映像による作品解説「彫刻」 上田久利 藤原健太郎 吉岡 徹
2:40-3:40 映像による作品解説「洋画」 根岸右司 北本雅己

11月27日(日) 午後 1:30-2:30 映像による作品解説「書」 河野 隆 日比野実 吉澤鐵之

親子鑑賞教室 小・中学生と保護者対象 **事前予約要**

小・中学生とその保護者を対象に、日展作家が、部門ごとに会場で作品を見ながら説明。
その後簡単な作品制作を指導します。

定員:各部門10組20名程度。
日時:11月6日(日)・13日(日)・20日(日)
午前10:30～ 日本画、洋画、書 午後2:00～彫刻、工芸美術
場所:国立新美術館3階講堂と展示室

参加費:無料。保護者は入場券をご用意ください。
申し込み方法:往復はがきに参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門(第2希望まで)明記の上、〒110-0002台東区上野桜木2-4-1日展事務局・親子鑑賞教室係まで、10/28締め切り必着でご応募ください。TEL:03-3823-5701



親子鑑賞教室のようす

展示室での作品解説会

日展作家から展示室で作品解説を直接聞けるまたとないチャンスです。以下のイベントがあります。

らくらく鑑賞会 一般対象 **事前予約要**

日展作家とともに、時間をかけてゆっくり鑑賞していきます。昼食が付いた1日コースです。
定員:各回10-15名
日時:11月7日(月)・14日(月)・21日(月)・28日(月) 10:30集合 16:10解散(昼食付)
参加費:1名5,000円(入場料、昼食、テキストほか)予約はTEL03-3823-5701まで。

ミニ解説会 一般対象

平日の午後1:30から各部門で日展作家が30分間作品解説を行います。お一人でも気軽にご参加ください。
定員:各部門20名。5部門で同時開催
日時:会期中の平日(初日、「日展の日」を除く) 午後1:30から30分程度
参加費:無料、各自入場券をご用意ください。予約制:当日受付あり

グループ作品解説 15名前後の団体対象 **事前予約要**

平日に15名前後の団体で作品解説をご希望の方に日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書のうちいずれか1部門を1時間かけて日展作家がご案内いたします。また、学生団体について、校外学習やクラブ活動など、学年や目的に応じた解説をいたしますので事前にご相談、ご予約ください。TEL03-3823-5701

開催概要

10月28日より、今年も日展を開催いたします。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5科にわたり、全国各地から応募された作品の入選者ならびに無鑑査(日展会員、準会員、前年度特選受賞者)の作品、約3,000点が、国立新美術館の展示室に一堂に介します。幅広いジャンルの芸術作品、しかも現代の傾向をご覧くださいませ。東京展の後、全国4カ所を巡回します。

展覧会名	改組 新 第3回 日本美術展覧会 The 3 rd Reorganized New NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition
会 期	平成 28年10月28日 [金]― 12月4日 [日] 休館日: 毎週火曜日 ※ 11月12日(土) は「 日展の日 」として、 入場無料 となります。 観覧時間: 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)
会 場	国立新美術館 東京都港区六本木 7-22-2 東京メトロ千代田線 乃木坂駅 直結 大江戸線 六本木駅7出口徒歩約4分 東京メトロ日比谷線 六本木駅4a出口から徒歩約5分
主 催	公益社団法人 日展
後 援	文化庁／東京都

一般問合せ [代表] 03-3821-0453 [展覧会関係] 03-3823-5701

入場料	一般	高・大学生	小・中学生は無料。 団体券は20名以上。20枚購入につき招待券を1枚進呈。前売券は、チケットぴあ、ローソンチケット、CNプレイガイドほか主要プレイガイド、デパート友の会、画廊、画材店、JTB、近畿日本ツーリスト、東京メトロ定期券売り場などで発売。(販売期間: 9月1日～10月27日)*東京メトロは一般券のみ。一部定期券売り場を除く
当日券	1,200円	700円	
前売券・団体券	1,000円	500円	

★お得なチケット★

- ◆ ペアチケット (前売りコンピューターチケットのみ)
1枚 1,800円。お二人で入場の方、またはお一人で会期中2回入場いただく方にお得なチケットです。(他の割引との併用はできません。販売期間は前売り券と同じ)
- ◆ トワイライトチケット 時間限定入場券(会場窓口販売)
夕方2時間、通常料金の1/4の価格でご覧いただける絶好のチャンスです。
作品点数が多いので、科ごとにご覧になるなど、何度も分けてご覧いただくにもお得なチケットです。
観覧時間: 午後4時～午後6時 入場料: 一般300円／高・大学生200円

巡回展 京都、名古屋、大阪、富山

日展の特徴とみどころ

今年109年目の美術団体

日本が鎖国をやめて、西洋の文化を取り入れ、新たな文化国家を目指し始めた頃、日本の美術振興を目的に1907年明治40年に始まった文部省美術展覧会(文展)が基となっています。現在は民間団体、公益社団法人日展が開催。今年109年目となる美術団体です。

日本で最も大きな公募展

全国各地から約12,000点の応募作品が集まります。そのなかで、昨年は2,268点が選ばれ、無鑑査の作品とともに、約3,000点が5つからなる部門毎に会場いっぱいに展示されます。

日展は五科(日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書)がそろって、世界でも類を見ない総合的な公募展

芸術の中でも5つの部門を総合的に鑑賞できる展覧会です。来館者は、科ごとに展示された作品を鑑賞しながら、心に響く部門や作品を探す楽しみがあります。日展作家は、他の科との交流を通し、刺激を受け合うことでまた新たな創作へとつなげています。

日本の芸術家の渾身の最新作が集結

厳しい審査を経て選ばれた作品。会場には、作家のエネルギーが満ち溢れています。現代日本を生きる10代から100歳までの全国に散らばる芸術家が世の中を敏感にキャッチし、自ら表現した作品は、日本の今を映しているともいえます。最新の芸術作品を鑑賞することができます。

日展で活躍した芸術家たち

109年の伝統のなかで、さまざまな芸術家を輩出してきました。かつて日展三山と言われた 日本画家 東山魁夷、杉山寧、高山辰雄をはじめ、横山大観。洋画では、東京美術学校に油絵科を設立した黒田清輝、藤島武二、棟方志功。彫刻では高村光雲、朝倉文夫、清水多嘉示、山崎朝雲。工芸美術では板谷波山、楠部彌弑、松田権六。書は青山杉雨、尾上柴舟、日比野五鳳をはじめ、日本の美術界に功績を残す数々の芸術家を輩出しています。

全国の日展会員がバックアップし、鑑賞を助けるさまざまなイベントを開催

(次ページをご覧ください)



Since 1907

日本画 洋画 彫刻 工芸美術 書

約3,000点の新作・入選作が全国から集まり、一堂に会します。
熱気あふれる会場で今年の日本の美をみつけてください

日展

改組 新 第3回 日本美術展覧会

平成 28年10月28日[金]— 12月4日[日]

国立新美術館

火曜休館 ※11月12日(土)は「日展の日」として、入場無料となります。
午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)
会期中は作家による解説、講演会なども多数開催されます。